



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ランデ・ヴェーにおけるロシア人」考
Author(s)	出, かず子; Ide, Kazuko
Citation	スラヴ研究, 16, 57-89
Issue Date	1972
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5017
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112944.pdf



「ランデ・ヴーにおけるロシア人」考

出 か ず 子

は し が き

本稿で取り扱われる材料は、わが国でも二葉亭訳『片恋』で知られているトゥルゲーネフの小説『アーシャ』《Ася》¹⁾に対するチェルヌィシェフスキーの評論「ランデ・ヴーにおけるロシア人」²⁾である。「ちょうど私の二十五の時でした、と某という男が話し出した、……」で始まる、この美しいライン河畔を背景にしたロシア人青年男女の物語りは、二葉亭の「小説の題のつけ方」でも確かめられているように、『片恋』の悲しい愛の物語りである。それを読む者は誰でも、その作家に特有の流麗な文章でつづられた美しい章句のなかに新しい愛のよろこびと別離の悲しみがたたえられているのを見て、恋愛詩の珠玉と認めている。これに対して、「革命的民主主義者」チェルヌィシェフスキーの評論について時に聞かれるのは、愛のかよわぬ無骨な政論という悪評である。例えば E. H. カーによれば、「男と女の関係、とりわけ夫婦の関係をあつかう本においては、かれは、その関係の肉体的な側面は本質的なものではなくまじめに論ずるには値しないとして、簡単にかたづけしてしまう。かれは、すでに、トゥルゲーネフの小説『アーシャ』への評論のなかで、自分の立場を次のように明らかにしていた。すなわち、『性的な諸問題はやめたまえ。現代の読者はそれらに関心を抱いていない。読者は、行政および司法制度の完成や、財政問題や、農民解放問題に関心を持っているのだ。』と」³⁾。このように、チェルヌィシェフスキーは、『アーシャ』のならぬ恋の詩的な描写をいっさい退けて、ロシア・リベラリズムの政治的弱点に攻撃を加えたのだという解釈が流布している。これは単に西欧だけにとどまらず、かつてソ連でも広く行なわれていたところであった。例えば、1950年に E. エフイーモヴァは、恣意的な引用をまじえながら結論を急いで、この評論をトゥルゲーネフその人に対する反駁の書と見なし、作家の政治的な弱さを暴露したものであると強調している。⁴⁾ わたくしは、以下に本稿の本文において、チェルヌィシェフスキーのこの評論が愛を退けて政治をたたえたものでもなければ、トゥルゲーネフ自身に批判や攻撃を加えたも

1) И. С. Тургенев, Полное собрание сочинений и писем в двадцати восьми томах, М.-Л., «Наука», 1960-1968, Сочинения, т. VII, стр. 71-121. (以下、このテキストから引用する場合は巻数とページ数のみを記す)。

2) Н. Г. Чернышевский, Русский человек на rendez-vous—Размышления по прочтении повести г. Тургенева «Ася»—: Полное собрание сочинений в пятнадцати томах, М., ГИХЛ, 1939-1953, т. V, стр. 156-174. (以下、このテキストから引用する場合は頭文字 Ч. をそえて巻数をローマ数字, ページをアラビア数字でそれぞれ記す)。

3) E. H. Carr, Introduction (1960) in: Chernyshevsky, *What is to be done?*, New York, Vintage Books, 1961, p. xiv. E. H. カー, 南塚信吾訳『ロシア革命の考察』みすず書房, 1969, p. 61 参照。

4) См. Е.Ефимова, Творчество И. С. Тургенева в оценке В. Г. Белинского, Н. Г. Чернышевского, Н. А. Добролюбова, «Орловский альманах» кн. 3, Орел, 1950, стр. 156-158.

のでもないことを、明らかにするであろう。

ここでは、まえおきとして、えてして陥りがちな誤解を避けるために、あらかじめトゥルゲーネフとチェルヌィシェフスキーとの関係について多少述べておきたい。例えば試みに、こんにちロシア人民主義の興味深い通史として知られている F. ヴェントゥーリ⁵⁾の名著⁶⁾をひもといてみると、二人のあいだにはチェルヌィシェフスキーの美学に関する学位論文を機縁として早くから「袂を分かつ原因」のひそんでいたことがわかる。それ以来、『その前夜』に対するドブロリューポフの評論「その日はいつくるか」によって作家と二人の評論家とのあいだに決定的な決裂がおこるまでの数年間、トゥルゲーネフとチェルヌィシェフスキーとの関係は悪化の一途をたどったような印象を受ける。ヴェントゥーリは、それは「激烈な闘争」であったと言い、トゥルゲーネフの激しい非難のことばを引用している。「これらの人々は文学上のロベスピエールである。かれらは詩人シェニエの首をはねるのに一瞬たりとも躊躇しないだろう」。最後の決裂に至るまでの過程で、「改革のハネムーンの時期が終ったころ」、チェルヌィシェフスキーは当時の文人たちを「風向きによって向きを変える風見のにわとり」にたとえ「文学においても鉄の独裁が必要だ」と主張した。ヴェントゥーリによれば、本稿の主題である『アーシャ』に対する評論こそがまさにその「鉄の独裁」の例示である。もちろん、ドゥルジーニンやトルストイのもっと激しいチェルヌィシェフスキー非難——「屍体の匂いがする」とか「南京虫の匂いがする」とか——を和らげるトゥルゲーネフの意見が全く無視されているわけではない。しかし、チェルヌィシェフスキーの『アーシャ』論がその愛の物語りに鉄拳を加えることによって作家自身を制裁するものであったと見なされていることには変わりがない。このように、トゥルゲーネフとチェルヌィシェフスキーとの関係をもっぱら政治運動や社会思想の次元に帰して愛や文学の水準における両者の関係を無視する見方は、単にヴェントゥーリにとどまるものではない。ソ連においてもベルリーネルの『チェルヌィシェフスキーとその文学上の敵たち』⁶⁾など以来かなり根強く残っているように思われる。以下の本稿でもそれらの諸連関を全面的に取り扱かうことはできないので、あらかじめ全体の見通しについて一言するならば、貴族地主出身にもかかわらず作家の天分によってリアルな生活の必要を理解していたトゥルゲーネフに対して、既成の価値体系のまにまに動くドゥルジーニンのようなリベラルからの影響の危険を教えようとしたのがさきの「風見のにわとり」の忠告——これはトゥルゲーネフその人にあてた手紙のなかに見られる——であり、トゥルゲーネフのすぐれた天分によってリアルに描き出されたリベラル貴族知識人の本質を、それを読むリベラルの読後感にあらわれた意識現象を内面から掘りおこすことによって、あらわにしようとしたのが、ほかならぬ「ランデ・ヴーにおけるロシア人」なのである。本論でわたくしが明らかにしようとした問いは、ルカーチのことばを借りて言い換えるならば、それは次の問いである。「では、どのようにして、作品と批評のあいだに、つながりをつけたらいいのか？ チェルヌィシェフスキーの政治的な批評は、この小説の有機的な、芸術的な組み立てを、ぶちこわしにするものではないか？」⁷⁾このような問いに答えるた

5) Cf. F. Venturi, *Roots of Revolution*, tr. by F. Haskell, New York, 1960. pp. 156-157.

6) Г. Берлинер, *Чернышевский и его литературные враги*, М.-Л., Гиз, 1930.

7) G. ルカーチ『ルカーチ著作集』第6巻, 白水社, 1969, p. 181.

「ランデ・ヴーにおけるロシア人」考

めに、わたくしは本稿を書いた。

I

トゥルゲーネフの『アーシャ』は1857年7月ライン河畔ジンツィヒで書き始められ、同年12月ローマから『同時代人』誌編集部に送られた。初めは9月にできあがると約束されていたので、編集部はそこにご不安を抱き同行の B. П. ボトキンに促進がたを依頼したりしたが、トゥルゲーネフは、清書の段階でも、のちに問題になる最後のあいびきの場面に苦渋したあげくやっと仕上げ、印刷前の訂正を П. В. アンネンコフに一任して編集部に送った。⁸⁾ 原稿を読んだアンネンコフは文句なしに有頂点となり、次いで И. И. パナーエフ、チェルヌィシェフスキーらも校正刷りを綿密に読んだ。そのとき編集部内にテキスト訂正の是非をめぐる意見の不一致が生じたが、それはトゥルゲーネフ自身が苦渋を感じたあいびきの場面でのアーシャに対する主人公 Н. Н. の振舞いに関する個所であった。この編集部内の論議は、のちに見るように、チェルヌィシェフスキーの『アーシャ』論、——「ランデ・ヴーにおけるロシア人」——の冒頭部分の解釈と直接関係があるばかりでなく、その『アーシャ』論全体を生み出すきっかけになったもののように思われる。編集部全員がその作品に歓喜していることを伝えた手紙のなかで、ネクラースフは次のように編集部内の事情を記している。「個人的にわたしの一つの意見がありますが、それは重要なものではありません。つまり最後の局面でのあいびきの場面で、主人公は突然非難を爆発させて、君が期待しないような本性の不必要な不作法さを示したことです。これらの非難を和らげ、減らすことが必要でしょう。わたしはそれを望みはしましたがあえてしませんでした。それ以上にアンネンコフはそれには反対でした」⁹⁾

最後のあいびきの行動の場面において主人公 Н. Н. はそれまでの品格のある勇敢さを全うするように修正されるべきではないかという、このようなネクラースフの意見は、のちに見るように、文学に理想的な主人公や純粋な美しさを求める多くの読者たちに共通の読後感であったのであろう。しかしそれに対して、アンネンコフとチェルヌィシェフスキーは、共に、原稿のままでよい、いな、そのままの方がよい、と主張した。とはいえ、この二人が考え方のうえで全く同じであったわけではない。このことはチェルヌィシェフスキーの『アーシャ』論、すなわち「ランデ・ヴーにおけるロシア人」に対してアンネンコフがただちに「弱い人間の文学的タイプについて」¹⁰⁾という一論をものして反駁を加えたことから明らかである。両者の違いは、一口に言えば、当時のロシア貴族知識人のいわゆる余計者の弱いタイプの描写を作家のリアリスティックな功績と見るか、それともそうした「弱い人間」を現実のロシア社会における唯一の理想的な人間と見るか、にあ

8) См. Тургенев, Письма, III, стр. 126. (1857年7月4日(16)日付トゥルゲーネフのパナーエフあて手紙); Тургенев и круг «Современника», М.-Л., «Academia», 1930, стр. 429. (1858年10月16日(29)日付パナーエフのボトキンあて手紙); Тургенев, Письма, III, стр. 167. (1857年11月22日(12月4日)付トゥルゲーネフのネクラースフあて手紙)。

9) Тургенев, Сочинения, VII, 423-424.

10) П. В. Анненков, О литературном типе слабого человека, «Атеней» 1858, ч. 4, № 32.

た。ここでアンネンコフの見解について多少説明を加えておくならば、かれはその反論のなかで、文学に対して弱い人間の創造を要求し、「さしあたり、このような性格は、……われわれと同時代の生活においても、またその生活の反映である現代の文学においても、唯一の道徳的タイプである」¹¹⁾ことを主張したのだった。

ちなみに、このようなさまざまな批評のなかであって、トゥルゲーネフ自身は自作に対して、どのような考えをもっていたのであろうか。ちょうどそのころ現れてきたロシアの新しい読者層の登場に対するかれのデリケートな予感と作家であることをやめようとしたほどまでの不安、『アーシャ』の末尾部分の執筆における苦渋を別とすれば、かれ自身「涙せんばかりに書いた」と述懐しているように、他からの賛辞を聞くことをこよなく喜んだ。¹²⁾ またチェルヌィシェフスキーの批評に対する発言もこれまでに伝えられておらず、見解の不一致の積極的な表明も何一つ見いだされていない。¹³⁾

ところで書き手自身が苦渋を感じ、受け取った編集部に論議をかもした作品『アーシャ』の末尾部分とはいかなる筋の結末部分なのであろうか。もともとこの小品には筋らしい筋はない。小説『アーシャ』は、1857年に45歳のH. H. が自分の20年前の回想を物語るという形で組み立てられている、数日間のライン河畔を舞台にした一つの中篇である。それは、当時25歳のH. H.、17歳のアーシャ、その兄27歳のガーギンの、三人の人物の関係、三人の心理的な、せいぜい二、三週間のできごとを、出会いから始まって最後に思いがけず別れてゆくという書き方によって、女主人公アーシャを中心にまとめあげられている。ここで物語りの筋としては当然のことながらH. H. とアーシャのあいだに愛が芽ばえる。そして二、三週間ばかりののち、「決定的な瞬間」にいたって、ついにアーシャから申し出されたあいびきの場面で訣別に至る。「わたしはあなたのものよ」というアーシャの行動への呼びかけに対して、H. H. は凶らずも狼狽して逃げ出す。翌朝アーシャ兄妹はすでに町を去り、それを追うH. H. の上にヨーロッパの空はものがなしい。——そういう物語りである。最後の行動におけるH. H. の狼狽、臆病、不作法、これらが作家にとっても批評家にとっても問題の種であった。チェルヌィシェフスキーは、そこに「ランデ・ヴェーにおけるロシア人」、ひいては革命的行動における「ロシア人」、とりわけ貴族知識人の問題をとりえて、評論を企てる。

II

しかし、一般に議論の書き出しはその後の論旨展開の仕方を決定してしまうものなの

- 11) П. В. Анненков, Там же, стр. 327. なお、このようなアンネンコフの見解は、小説『アーシャ』におけるトゥルゲーネフの非情なりアリズムをさらにはっきりと評価したドプロリューポフの見解とも対立するものであって、のちの「余計者」論争のきっかけとも見られるものである。
- 12) См. Тургенев, Письма, III, 190. (1858年1月18(30)日付トゥルゲーネフのネクラーツフあて手紙); Письма, III, 191. (1858年1月19(31)日付アンネンコフあて手紙); Письма, III, 210. (1858年3月27日(4月8日)付トルストイあて手紙)。
- 13) См. М.П. Николаев, Тургенев и Чернышевский. —В сб.: Творчество И. С. Тургенева, М., Учпедгиз, 1959, стр. 356.; Б. И. Бурсов, Мастерство Чернышевского-критика, Л., «Советский писатель», 1956, стр. 253.

「ランデ・ヴーにおけるロシア人」考

で、チェルヌィシェフスキーもその冒頭部分の書き出しには、たいへん苦勞したようである。それは後述の、伝えられているいくつかのヴァリエントがよく示している。のちにそれらのヴァリエントを整理してかれの論旨展開の方向を明らかにするが、そのためにも、まず版本の冒頭部分を掲げておかなければならない。

かれの評論は次の文章で始まる。

『即物的、告発的なたぐいの物語りは読者に非常に重苦しい印象を残す。それゆえわたくしは、それらのもつ効用や高邁さを認めながらも、わが国の文学がもっぱらこのような陰うつな方向をとったことに十分には満足していない』

多分愚かではない人々のかなり多くのもがそのように言っている。あるいは、もっと正しく言うならば、農民問題があらゆる思索、あらゆる会話の唯一の主題となるまでは、そのように言っていた。¹⁴⁾

この文章については、すぐに次のような二、三の問いが生まれるであろう。まず、「即物的 (деловой)、告発的なたぐいの物語り」とはどのようなものを指しているのか。そして、19世紀前半のロシア文学においてそのような「物語り」はいかなる位置を占めるのか。次に、「多分愚かではない人々」とはどのような人々のことなのか。そして、そのような人々は文学と農民問題とに対していかなる態度をとったのであろうか。ここではまず第一の「即物的、告発的なたぐいの物語り」についてだけ記しておく。それは、評論の少し先の方で述べられているように、「強要や賄賂を伴った三百代言」、「きたないペテン師」、「自分は社会の恩人だときれいなことばで説明する悪徳官吏」や「これらすべてのおそろしい卑劣漢に苦しむ町人、百姓、小役人」など、これらの、みにくい現実の人間を「即物的」に辛辣に描き出し告発してゆく物語りのことである。

ところで、上記の引用文には次の文章がつづく。

「かれらのことばが当たっているか、当たっていないかは知らない。しかし、わたしが、このまずは唯一のよい新しい小説を読み始めたときに、わたしはこのような考えの影響下にあった。その小説からは、最初の数ページですでに即物的な物語りからとは全く別の内容、別のペースを期待することができた。」¹⁵⁾

「まずは唯一のよい新しい小説」とは『アーシャ』のことであることは、いうまでもない。それにしても、チェルヌィシェフスキーは、事実、上記の「愚かではない人々」の考えの当不当が分からないままにその影響下にあったのであろうか。いずれにせよ、版本の冒頭部分は、このように「愚かではない人々」の立場に身を置いてその意識において書き出されている。そして、チェルヌィシェフスキーは清らかな美しい珠玉篇『アーシャ』に触れた感想を次のように述べている。

14) Ч., V, 156.

15) Ч., V, 156.

「小説の舞台はわれわれの家庭生活のみにくい状況のいっさいから遠く離れた外国である。その小説の登場人物はすべてわれわれのうちの最良の人々であり、たいへん教養があり、非常に人間味のある、きわめて高貴な考え方に貫かれた人々である。その小説は、人生のいわゆる暗い面のどの一つにも関係しない純粋に詩的な、理想的な方向づけを持っている。そこで、魂が休まりすがすがしくなるだろうとわたしは考えた。」¹⁶⁾

ついで、トゥルゲーネフが苦渋した結末部分、甘い哀愁、切ない歓びを伴う最後のあいびきのシーンは、チェルヌィシェフスキーによって次のようにまとめられる。

「かれは、自分を愛している少女にこのうえなく強い純粋な愛着を感じている。かれはこの少女を見ないでは一時間たりとも生きてゆけない。かれは四六時中彼女の美しい面影を思い描く。至福に心が溺れる愛の時がかれに訪れたとっていいだろう。われわれが見るのはロメオとジュリエットであり、かれらの幸福は何ものにも妨げられず、かれらの運命が永遠にきめられる瞬間が近づく。——そのためにロメオはただ『ぼくは君を愛しているけど、君はぼくを愛しているかしら』と言いさえすればよかった——そしてジュリエットは『ええ……』とつぶやく。ところでわがロメオは（物語りの作者が小説の主人公の名前を知らせてくれているので、われわれはこのようにロメオと呼ぶ）ジュリエットとのあいびきに姿を現わして、いったい何をしているのだろうか。ジュリエットは愛におののきながら自分のロメオを待ちこがれる。彼女はかれから愛のことばを聞くにちがいない——このことばは、かれらのあいだではそれまで口にされなかったが、いまやかれによって口にされ、ふたりは永遠に結ばれるであろう。かれらを待つのは至福であり、決意の勝ちほこった瞬間を地上の人間にとってほとんど耐えがたいものにする熱狂を伴うような、崇高な純粋な至福である。人々はずっと小さな喜びにも耐えられなかったものだ。彼女は自分の前に現われた愛の太陽の輝きから顔をおおって、おののく小鳥のように腰かけている。せわしく息づき、全身ふるえている。かれが入ってきて彼女の名を呼んだとき、さらにはげしくふるえて眼を伏せる。かれを見ようとするが見ることができない。かれは彼女の手を取る——その手は冷たく、かれの手のなかで死んだようにじっとしている。彼女はほほえもうとするが蒼ざめた唇はほほえむことができない。かれと話し出そうとするが声はとぎれる。ふたりとも長いこと沈黙し、——かれ自身言っているように、かれも心が和らぎ、いまやロメオは自分のジュリエットに言う。……」¹⁷⁾

このような書き振りからも明らかなように、チェルヌィシェフスキーは、物語りの「決定的瞬間」のその直前までは、その小説の詩的な理想によって自分の魂にすがすがしさを感じたことをかくさない。あるいは「愚かではない人々」のそうした感情の立場に身を置いている。

ところで「決定的瞬間」とはどのような場面の展開としてとらえられるのであろうか。

16) Ч., V, 156.

17) Ч., V, 157.

「ランデ・ヴァーにおけるロシア人」考

これこそがチェルヌィシェフスキーの批評論文のその後の論旨展開の糸口をなすものである。すなわち、

「しかし、物語りの最後の数ページは、最初の数ページとは似ても似つかず、この小説の読後には、そこからは恥知らずの盗みをする卑劣な収賄者たちの物語りからよりもさらにいっそう大きなやるせない印象が残る。収賄者たちは悪業を働らくが、かれらはわれわれの誰からもはっきり悪人と認められており、かれらからは生活の改善をわれわれは期待しない。社会には、かれらの有害な勢力をさまたげ自分の高貴さによって生活の性格を変える社会層が存在する、とわれわれは考える。この幻想は、この小説のなかで無残にもうちこわされる。この小説は前半できわめて明るい期待を抱かせるのではあるが。

そこにいる人物は、すべての高い感情に向かった心の持主であり、確固たるまじめさの持主であり、われわれの世紀が高貴な志向の世紀と呼ばれるゆえんのすべてをわがものにしていく思想の持主である。それなのに、いったいこの人物が行なっていることは何か。かれは最も下劣な収賄者でさえ恥じるようなシーンを演じているのだ。」¹⁸⁾

小説の最後のいわゆる「決定的瞬間」で高貴な思想の持主である主人公ロメオが演じる下劣このうえないシーンとは、いったいどのような狼狽、臆病、不作法なのであろうか。その答えとしてチェルヌィシェフスキーは小説に即して、決定的なあいびきの場面でわがロメオ、H. H. が、わがジュリエット、アーシャに口走ったことばを取り上げている。

「だがかれは彼女にいったい何を言うのか。かれは彼女にこう言うのだ。『あなたのせいですよ、あなたはわたしをいやなことに巻込んだのです。わたしはあなたに不満なんです、あなたはわたしを傷つけているんです、だからわたしはあなたとの関係を絶ち切らなければなりません。あなたとお別れするのはわたしにとっていやなことですが、どうかここから少しでも遠くに行ってください。』」¹⁹⁾

チェルヌィシェフスキーによれば、魂のすべてを与え蒼ざめた面持ちをして相手から愛の決定的な告白を待ち望んでいるジュリエットに、このような問責のことばを吐くとは、「これはとんでもないこと！（это изумительно!）」²⁰⁾なのである。チェルヌィシェフスキーは「多分愚かではない人々」、「多くの読者」のなかに身を置いて、このような予期せぬ最後の転換から読者の受ける印象をわがものとしてロメオの下劣さを弾劾し、あげくの果

18) Ч., V, 156-157.

19) Ч., V, 157. このことばはそのままトゥルゲーネフの文章のなかには見当たらない。批評を展開するための要約であろう。См. Тургенев, Сочинения, VII, 111-114. この点に関して、F. B. ランダルは「これはトゥルゲーネフの物語りのなかで実際にロメオが言っていることばの快活なパロディである」と述べている。Cf. F. B. Randall, *N.G. Chernyshevskii*, New York, Twayne Publishers, 1967, p. 65.

20) Ч., V, 157.

ては、このような顛末を描くことによって読者に「やるせない」読後感を与えた作者トゥルゲーネフに恨みのことばを向ける。

「これは何という愚かな残酷さであろうか。これは何という低劣な無神経さであろうか。それなのにこれほど卑劣に振舞うこの人間がそれまで高貴に見えたとは！」²¹⁾

「しかり。詩人は自分が立派な人間について物語っているかのように考えることによってあまりにも粗雑な誤りを犯した。その立派に見える人間は札つきのろくでなしよりもっと悪党なのだ。」²²⁾

「多くの読者」が小説を最後まで読んで、その最後に与えられる読後感のやるせなさ、そのようなやるせなさを与えた作家に対する憎しみ、そこからひいては結末の取り扱いにおける作家の「粗雑な誤り」をとがめたい気持。このような印象から、結末部分の修正を要請するように導かれたのが、ほかならぬ先述のネクラソフであり、編集部内の論議もまたそれをめぐるものであった。そしてチェルヌィシェフスキーは、先述のように、修正に反対であった。

ここで「ランデ・ヴーにおけるロシア人」の副題が「トゥルゲーネフ氏の小説『アーシャ』読了後の考察」であることを思い起こさなければならない。その副題に示されているとおり、チェルヌィシェフスキーがその論旨展開の端緒とするのは、まさに上述のような「愚かではない人々」, 「多くの読者」の読後感である。その読後感を吟味にかけるかのように、かれは問う。「だが作家がその主人公のことで誤ったというのはたしかであろうか。」²³⁾そして、この問いとの関係でチェルヌィシェフスキーが予想している論点は、つづめて言えば、二つある。一つは、そのような主人公、つまり高貴な思想の持主でありながら卑劣な振舞いをするロメオ、これこそがロシア貴族知識人のリアルな姿ではないかということであり、もう一つは、それがこの小説の誤りであるとすればトゥルゲーネフの他の一連の作品もすべてこの誤りに陥っていることになりはしないかということである。このように主要な論点を次々に招きよせるような、豊かな端緒をつかむことに、かれは成功した。そこに漕ぎつけるまでの苦勞の跡を示しているのが冒頭部分のいくつかのヴァリエントである。そこには、さきに提示したまま放置されたいくつかの問いに対する答えも見いだされる。

III

冒頭部分のいくつかのヴァリエントの整理、考察は、のちに見るように、チェルヌィシェフスキーの文学批評の手法、あるいはもっと一般的にかれの思想の営みのやり方の秘密

21) Ч., V, 157-158.

22) Ч., V, 158.

23) Ч., V, 158.

「ランデ・ヴーにおけるロシア人」考

を明らかにしてくれる。そのために、多少テキストの考証にわたる整理に立ち入らなければならない。それらのヴァリエントは、国立中央古文書保管所に保存されている二つないし三つの手稿として伝えられている。²⁴⁾ 以下ではそれらに、ある執筆の順序を想定することによって、かれの手法、やり方をできるかぎり割り出してみたい。まず第一ヴァリエントと考えられるものは次のとおりである。

『即物的、告発的なたぐいの、シチェドリン、ペチェールスキーその他の物語りは、もちろん、非常に有益である。しかしそれらは読者の心に非常に重苦しい感情を残す。詩は、あらゆる暗い一面性の、明るい理想における和解であるべきである。それでわたくしは『アーシャ』を喜んで読んでいる。それはきたない人間やみにくい事柄についての物語りで苦しめられた心をついにさわやかにしてくれる』。——このようなことばでよき知人の一人がわたしを迎えた。その知人は、わたしには胆汁質の思弁への偏頗があるといい、わたしが生活のなかによいものを認めようとせず、詩のなかに理想的なものを求めようとしないといって、わたしを責めていた人であった。そのような序のことばに続いて、『青銅の騎士』や『ボリス・ゴドゥノフ』よりも〕〔マーイコフ、フェート〕プーシキンの〔純粋な〕明るい詩よりも『判決記録』や『病院の記録』の方を好む人々に対する一連の嘲笑が述べられた。わたしは、これらの叱責をだまされて受け入れ、かれの説教がやや遅すぎることを自分の告発者に注意することさえしなかった。なぜならば、わたしはいまや決して胆汁気質ではなくて、かえって、期待と歓喜に満たされている〔喜んで〕からである。わたしはただその理想主義者に、……を〔めざまさせ〕心に残すはずだというその小説を最後まで読み終わったかとたずねた。』²⁵⁾

これを第二、第三ヴァリエントと較べてみると、「即物的、告発的なたぐいの」物語りの例としてシチェドリン、ペチェールスキーが挙げられている点は同じであるが、「明るい詩」の例としては、第一ヴァリエントではマーイコフ、フェート、プーシキンが挙げられているのに対して、第二ヴァリエントではプーシキンだけが「判決記録」や「病院の記録」に対置され、第三ヴァリエントではプーシキンの名も消えうせている。²⁶⁾ さらに、第二ヴァリエントでは『アーシャ』を読み始めてさわやかな感想を述べたその「知人の一

24) チェルヌィシェフスキー全集第五巻の註ではヴァリエントが二つあるとされているが、Б. И. Пурловはこれを三つと訂正している。См. Ч., V, 961.; Б. И. Бурсов, Мастерство Чернышевского-критика, Л., «Советский писатель», 1956, стр. 239. なお、これ以外のヴァリエント手稿は発見されていないが、存在しなかったという証明もない。Пурловは、かえって、その他にもあったにちがいないと推定している。

25) ЦГАЛИ, ф. 1, оп. 1, ed. хр. 149, л. 30. 次に引用されている。Б. И. Бурсов, Указ. соч., стр. 240, 引用文中の角括弧内は手稿の抹消部分。本文中にヴァリエント第一、第二、第三としたのは、Пурловの番号づけによるが、古文書保管番号は 30, 31, 32 に当る。

26) これは必ずしも第三ヴァリエントが執筆順序として第三であることを意味しないように思われる。執筆順序は、第三、第一、第二ヴァリエントの順であったと想定される。なお、第一、第二の表題は、「ランデ・ヴーにおけるロシア人—トゥルゲーネフ氏の『アーシャ』における一場面についての考察—」であり、第三の表題は、「ランデ・ヴーにおいてロシア人はいかに振舞う—トゥルゲーネフ氏の『アーシャ』における一場面についての考察—」である。

人」が小説を最後まで読み終わったときの印象についての後日談がつけ足されている。それは次のようなエピローグである。

「わたしはただ、かれが『アーシャ』を最後まで読み終わったときに、その印象はいかがかを待ちましよう、と自分の友人に断わっておいた。数日ご、かれと会ってこの話しを思い出させたとき、かれはいまいましそうにこう語った。無頼漢についてのシチェドリーンの物語りのどの一つも、わが社会の道徳的状况について、『アーシャ』ほど陰うつな思いを自分にめざめさせはしなかった。自分は『アーシャ』の初めの方を読んでたまされていた……、と。」²⁷⁾

ところで、以上を総じて版本の冒頭部分と比較するとき、二つないし三つの論点が見いだされる。その第一は、プーシキンやシチェドリーンなど文学作品の例示が故意につきつぎと抹消されていることであり、第二は、「知人の一人」あるいは「友人の一人」の感想や印象として述べられていたことばが「愚かではない人々のかなり多くのもの」とか「多くの人々」というふうに一般化されていることであり、それに反してその相手とされた胆汁質の「わたし」の立場が全くくرامまされていることである。

第二の最後の点から取り上げよう。これはさきに掲げた版本では、ただ、「あるいは、もっと正しく言うならば、農民問題があらゆる思索、あらゆる会話の唯一の主題となるまでは、そのように言っていた」というふうに、「わたし」の立場が全くかげにかくされてしまっている点である。それに対して、第二ヴァリエントではチェルヌィシェフスキーに代表される胆汁質の「わたし」の立場が公然と述べられていた。それは、第三ヴァリエントでは、もう少しやさしいことばで次のように言われている。

「その友人は、胆汁質の思弁への偏頗があるといってわたしを告発していた人であった……〔悲しげな観点から〕不満な眼をもってすべてを見、生活のなかに何ら慰めとなるものを認めず、現在のわれわれのもとでの明るい詩の可能性を拒否したりなどする人々……。」しかし、いまやそのような「わたしたちが最近わが国の状況のなかに見いだしはじめたのは悲哀だけではない」。²⁸⁾

チェルヌィシェフスキーがこのように自分の過去の暗い胆汁質時代といまや農奴解放の動きが目立ち新しく開けてきた状況を迎えた自分の「期待と歓喜」の立場とを対照させて宣言したとき、その宣言に続いてその立場から、リベラル貴族やかれらの愛好するひたすらに「〔純粋な〕明るい詩」の立場を外側から攻撃する告発文を書くこともできた。“いまや農奴解放のさし迫った状況のなかで『アーシャ』に出てくる主人公のようなリベラルは

27) Ч., V, 961.

28) 第二ヴァリエントのこの部分は、第一のものと大差ない。後段が「胆汁質の間はいまはもはや胆汁質ではなくなって、ほめ、かつ喜ぶべき理由を見いだしている」と言いかえられているだけである。「胆汁質」気質についての言及は、版本冒頭調分では消えているが、版本テキスト中で他に数回現われている。См. Ч., V, 162, 165. 引用文中角括弧内は手稿の抹消部分。

裏切り行為に走る以外にはなく、そのような主人公の悲恋を美化して描くことは現実政治の要求に答えていない”というふうに。ところが実際には、前掲の版本冒頭部分に明らかのように、チェルヌィシェフスキーは、自分を含めて『アーシャ』を読み始めたときのすがすがしさと読後感のやるせなさから出発して、「多くの読者」とともに、その小説が現実を与える身につまされるさし迫った感想を自己分析してゆくことを自分の課題とした。いうならば、「明るい詩」がいまやもたらず一種の暗さを自分のものとして内側から批判してゆこうとする自己告発のしかたである。²⁹⁾ かれの論理の展開の出発点に置かれた問い、すなわちトゥルゲーネフは「自分の主人公のことで誤ったというのは確かだろうか」という問い——のちに見るように、誤っていないというのがかれの答えであるが——は、そのような自己告発のための第一問なのである。三つのヴァリエーションで、ある「知人の一人」の意見として引用されたものが、いわばチェルヌィシェフスキーを含むかに見える「多くの読者」として一般化されたのは、こうした理由によるものであろう。これは単なる鞘晦趣味からきたものではないように思われる。

次に、さきの第一の論点についていえば、なぜ「即物的、告発的なたぐいの物語り」の例としてのシチェドリン、ペチェールスキーの名前がはぶかれ、また「純粋に詩的な理想的な方向づけをもった」文学の代表としてのプーシキン、その流派に属するとされたマーイコフ、フェートの名前が次第に削除されたのであろうか。周知のように、シチェドリンは『県の記録』(1856-1857)の作者として、ペチェールスキーは『いにしえ』(1857)の作者として当時いわゆる「陰うつな方向」の文学作品によって読者に「重苦しい印象」を残していた作家たちであったし、他方マーイコフやフェートは甘美な詩の作者として当時読者の心を「詩的な理想」によってすがすがしくしていた作家たちであった。したがって、かれらの名前を当時のロシア文学における二つのタイプの例示として挙げることに、それほど大きな間違いがあったわけではない。しかし当時チェルヌィシェフスキーがそれら二つのタイプの方の巨匠としてプーシキンの名前を挙げることに、すでに一つの論争がからみついていた。というのは、純粋詩あるいは芸術のための芸術派の代表者の一人でもあり、『同時代人』誌の協力者でもあったアンネンコフがプーシキンの全集を編集出版したことを機縁として、あらためてプーシキン評価の議論が広く行なわれ、それに対してチェルヌィシェフスキーは独自の発言——「プーシキン原理」を唱える純粋芸術派との論争において³⁰⁾——をしていたからである。それゆえここにプーシキンの名前をあげ、その代表例として『青銅の騎士』、『ボリス・ゴドゥノフ』を掲げることは、いたずらに作品論、作家論、文学批評、文学史の領域に議論を誘い込むおそれが充分あった。この領域における評価として、チェルヌィシェフスキーは、必ずしもトゥルゲーネフをマーイコフやフェートと同列に置いて芸術のための芸術派に入れていたわけではないし、そ

29) このような自己告発の姿勢は、評論の本文中の次のような個所によくうかがわれる。例えば、「何故あなたがたがアーシャの高貴でない行為にかくも不公平に魅せられて、わがロメオを非難しようとしたのか、わたしは知っている。わたしがこれを知っているのは、わたし自身、あなたがたのなかに名残りとどめた根柢のない印象をしばらくのあいだ受けたからである」。Ч., V, 162. 「かれに似たわれわれは、他のいっさいの事柄においても、みずから何を期待し、自分のために何を期待すべきかが分かるであろう」。Ч., V, 166.

30) 拙稿「チェルヌィシェフスキーの美学理論 (I)」『スラヴ研究』No. 13, 1969, p. 96 参照。

ればかりか、かれの作品のもつリアルな性格を功績の一つ——「悲しむべき功績」であるとしても——に数えてさえいるのである。だが、文学史上でトゥルゲーネフのリアリズムをいかに位置づけ、『アーシャ』のすぐれた技法をいかに評価すべきかは、ここでは当面の問題ではなかった。むしろ問題は、このリアリスティックな作品『アーシャ』のなかでありのままに描かれている主人公たちの社会的性格をその小説の読後感を機縁として明らかにすることにあった。いうならば、少女アーシャの「魂のドラマ」を表現する技法を分析する作品論ではなくて、農奴解放期の貴族インテリゲンツィアと農民との出会いにおける前者の「ロシア人」のありのままの言動の来歴と将来を理論的に解明しようとする、いわばイデオロギー論であった。一見『アーシャ』の作品論のように見えるチェルヌィシェフスキーのこの「ロシア人」論は、その点で、トルストイの初期の作品についての、かれの純然たる作品論³¹⁾とはっきり区別されるべきであろう。³²⁾ したがって、この『アーシャ』論を“リベラル”作家トゥルゲーネフに対する批判的な作家論ときめこんだうえでの、そうした前提に立つさまざまの解釈は、すべて薄弱な基礎の上に築かれたものといわざるをえない。

IV

前述（第 II 節）したように、最後の局面で主人公 H. H. に対して読者が感じた幻滅は、そのような幻滅を与えた作者自身に対する非難に移り変わってゆく。すなわち、作者トゥルゲーネフに対して「多くの読者」はこう感じるにちがいない。

「この小説はこの不快至極なシーンによってすっかり損われており、主要人物の性格が一貫しておらず、もしその人物が小説の前半で現われているようなものであるならば、かれはこのような低級な無神経さをもって振舞うことはできなかつたし、またもしこのように振舞うことができたとしたならば、かれはそもそもの最初から全くの悪党として登場しなければならなかつたはずだ。」³³⁾

したがって、一貫した詩的、理想的感動を小説に求める「多くの読者」は、小説のある

31) См. Чернышевский, Детство и отрочество. Сочинение графа Л. Н. Толстого. Военные рассказы Графа Л. Н. Толстого. —: Ч., III, 421-431.

32) この点に関して、ブールツフは次のように述べている。「チェルヌィシェフスキーの興味をひいているのは別の問題である。—すなわち「最もすぐれた」人々が大きな社会的意義をもつ事柄においていかに振舞うか? ということである。それゆえかれの論文にとってトゥルゲーネフの中篇は出発点にすぎない。小説の主題はいわゆる「最もすぐれた」人々の社会的・心理的性質を明らかにする完全な可能性をかれに与える。かれらの社会的・政治的行動を彼は、小説の主題とは直接の関係をもたない事実に基いて明らかにする。//チェルヌィシェフスキーの文学批評論文においてしばしば用いられたこの手法は読者をも作家をも助けた。それは読者がその時代の社会生活と文学をよりよく理解し、作家が典型化の原理をよりいっそう徹底的に深く実現することを助けたのである。」Б. И. Бурсов, Вопросы реализма в эстетике революционных демократов, М., ГИХЛ, 1953. 小沢政雄訳『ロシア・リアリズムの系譜』pp. 252-253 参照。

33) Ч., V, 158.

「ランデ・ヴァーにおけるロシア人」考

べき姿をそれなりに仮定して、その視点からトゥルゲーネフのこの作品を非難するにちがいない。

「もし〔その主人公の一筆者〕この性格があいびきでのかれの無神経さに不満な人々がかくあれかしと望むようなものであったならば、つまりもしかれがとりこになった愛に身を投げ出すことを恐れなかったならば、おそらくこの小説は理想的、詩的な意味においてまさったものになったであろう。最初のあいびきのシーンの熱狂にその他のいくつかのきわめて詩的な瞬間が続いたであろうし、小説の前半の静かなすばらしさが後半で感動的な魅力にまで高まったであろうし、そしてペチョーリンふうの結末をもった『ロメオとジュリエット』第一幕の代わりにロメオとジュリエットあるいは少なくともジョルジュ・サンドのロマンの一つにどこかよく似たところのあるものになったであろう。小説に詩的に完全な印象を求める者は、実際に作者を非難するにちがいない。」³⁴⁾

すなわち、かれによれば、トゥルゲーネフは、小説の初めで崇高な甘い期待で読者をおびきよせておきながら、最後の決定的瞬間で臆病な主人公の月並なエゴイストの姿を示して読者をはっきりさせるというのである。チェルヌィシェフスキーは、このような主人公は「マクス・ピッコロミニに似た人物で始まり、一文カルタ遊びに興ずるザハル・シドルィチに似た人物で終わる」³⁵⁾ような人間だと言っている。

したがって、「多くの人々」の読後感を内面的に批判しようとするチェルヌィシェフスキーの問いが、前述のように定められたのは当然であろう。すなわち、「だが作家は自分の主人公のことで誤ったというのは確かだろうか」³⁶⁾

かれは、この問いに対して、あたかも帰謬法を使うかのように二つの推理で解答を試みる。まず第一は、「もしかりに作家が事実まちがったと考えられるならばたいへん慰めになるだろうが、しかし、主人公の性格がわが社会そのままであるということに、かれの小説の悲しむべき功績がある」³⁷⁾つまり、『アーシャ』における主人公の扱いが事実誤っており、最後までいわゆる理想的な姿で描かれるべきであったとするならば、およそ書かれるべき文学はすべてリアリズムを欠くこととなり、ただ読者の慰めになるような、うわべだけ美しいものであればよいことになり、というわけである。次に第二は、「もしも誤りを犯したのなら、かれがこの誤りを犯すのはこれが初めてではない。同様の状況に導く物語りがかれにいくらあろうと、かれの主人公は、それらの状況から抜け出るときにはいつも、われわれの前で全く狼狽した姿を見せている」³⁸⁾つまり、もし『アーシャ』の結末部分

34) ㉔, V, 158.

35) ㉔, V, 158. カルタ遊びに時間を費すみじめな俗物が、ここではシラーのドラマ『ピッコロミニ』や『ヴァレンシュタインの死』の主人公と対置されている。マクス・ピッコロミニの特徴は、理想的な家柄のよさ、感情の高貴さ、義務と名誉の意識である。

36) ㉔, V, 158.

37) ㉔, V, 158. この個所はトゥルゲーネフにおけるリアリズムを評価したものとして、しばしば引用されているが、文脈からいえば、ここではまだある論理的な展開の帰結として断言されているわけではなく、断片的な感想として述べられているにすぎない。

38) ㉔, V, 158.

の扱いが誤りだとするならば、トゥルゲーネフのその他の作品もすべて同じ誤りを犯していることになる、というわけである。そればかりではない。同じ誤りは単にトゥルゲーネフにとどまらずネクラソフ、ゲルツェン等同時代の文学作品にも共通したものになる。チェルヌィシェフスキーは、さらに次のようにも言っている。すなわち、「だが、主人公の性格におけるこの哀れな特徴は、あるいはトゥルゲーネフ氏の小説の特殊性なのだろうか。あるいは、まさにかれの才能の性格のためにこのような人物を描写する結果になっているのだろうか。全くちがう。才能の性格はここではなんの意味もないと思われる。今日のわが国の詩人のだれのであろうと、生活に忠実なよい物語りをどれでも思い起こしてみたまえ。そうすれば、もしも物語りに理想的な側面があるならば、この理想的な側面を表わす人物は、トゥルゲーネフ氏の人物と全く同じように振舞っていると確信してよい」³⁹⁾ その例証としてチェルヌィシェフスキーはトゥルゲーネフの『ファウスト』(1855、『同時代人』誌)、『ルーヂン』(1855執筆、1856『同時代人』誌連載)だけでなく、ネクラソフの『サーシャ』(1856)をも挙げ、さらにさかのぼってゲルツェンの『誰の罪か』(1841-46)にも言及している。要するに、トゥルゲーネフの『余計者の日記』(1850)が『祖国の記録』誌に掲載されたのち、その用語の定義が用いられ始め、やがて20年代から50年代にかけてのロシア文学における主人公の一類型を示すために広く用いられるようになった、いわゆる「余計者」のタイプの指摘とその分析である。ただしここでチェルヌィシェフスキーが「余計者」という用語を用いているというわけではない。

例えば、『ファウスト』では主人公は「ことばのうえだけの決断に関してさえ、かれはヴェーラの方から愛のことばを言わざるをえないように振舞う」。しかしそうしておきながら、いざ愛のことばを切り出されたときに、この主人公は「気が遠くなり」、かれが愛していたはずのヴェーラがいよいよかれに近づいて「これからあなたはどうなさるおつもり」とたずねると、もはやただただ「当惑する」ばかりだ。チェルヌィシェフスキーは、このような男性の行ないは「行状」(поведение)としか呼びようがないと言っている。次に『ルーヂン』は『ファウスト』の主人公よりもやや積極的であって「みずから自分の愛についてナターリヤに語りかけるほどに断固としている」が、あいびきでナターリヤから、ただあなたが愛してくれるのなら母の同意があろうとなかろうとかまわずにあなたについて参りますと言われたとき、また「わたしはあなたのものになりますわ!」と切り出されたとき、「おお、神さま!」と当惑の叫び声をあげて狼狽する。臆病、無気力で大詰めに近づくと内心大いにうろたえてしまい、そしてナターリヤの母親が反対ならその運命に服従すべきだなどと説教を始め、また「臆病者と呼ばれてナターリヤを責め出し、ついで自分の誠意について彼女に講義し始め、そして、いまかれから聞かなければならないのはそんなことではないと彼女に言われて、かれはこのような決定的なことになるとは思っていなかったなどと答える」⁴⁰⁾ ネクラソフの『サーシャ』に出てくる主人公アガーリンもまた同様である。この主人公はサーシャに対して「真実の太陽が地上に昇るだろう」と教え、その実現のために実践しなければならぬと言いながら、いざサーシャが実際に

39) Ч., V, 159.

40) Ч., V, 159.

「ランデ・ヴーにおけるロシア人」考

行動し始めると、「何をやってもすべて無益で何にもなりはしない、自分は『空虚なことを言ったものだ』と言う」。⁴¹⁾ これらの例でチェルヌィシェフスキーが論証し強調したいと思っていることの一つは、ネクラーツフの才能の性格がトゥルゲーネフのそれとは違って力や堅固さに欠けていないにもかかわらず、つまり才能の性格のいかんを問わず、主人公の類型が一致しているということである。

チェルヌィシェフスキーは、「決定的な瞬間」に行動の一步をふみ出すよりも退却の方を選ぶ、このような主人公の例はほかにも沢山集められると言い、それぞれの作家の性格の違い、そのような主人公に対する作家の見方の違いとは関係なしに、そのタイプを次のように要約している。この規定にはまだ「余計者」という用語が用いられてはいないけれども、それはいわゆる「余計者」についてのかれの規定と見なしてよいであろう。すなわち、

「行為が問題ではなく、ただひまな時間をつぶし、空っぽの頭や空っぽの心をおしゃべりや空想で満たささえしていればよいあいだは、主人公は非常にはつらつとしている。自分の感情や希望を直接正確に表現することがいよいよ問題になると、ほとんどの主人公はもうおろおろし始め、ものがはっきり言えなくなる。わずかの最も勇敢なものでさえ、やっと全力をふりしぼって、自分の考えについてのぼんやりした概念を与える何かをあいまいに表現することが、どうにかこうにかできるにすぎない。だが、誰かがかれらの希望をとらえて、『あなたがしようとしているのは、これこれだ。わたしたちはとてもうれしい。さあやってみなさい。そうすればわたしたちは助けるでしょう』とでも言ってみたまえ。こんなことを言われると、最も勇敢な主人公の半分は気を失ってしまい、他の半分はあなたがたのために工合の悪い状態に追いこまれたと言ってあなたがたを非常に不作法に非難し始め、そして次のように言い始める。自分たちはあなたがたからこのような提案を期待してはいなかった、自分たちは全く途方にくれて何も考えることができない、と」。⁴²⁾

チェルヌィシェフスキーは以上のようなタイプがロシアの貴族知識人、「最良の人々」の典型であり、それが小説『アーシャ』における主人公ロメオ、すなわち H. H. に表わされていると見たのである。このように不決断で、自己弁護的で、臆病なロメオによって行動的なジュリエットであるアーシャがどれほどの不幸をこうむるかが次の論旨展開である。だが、ここではちなみに、いわゆる「余計者」という用語とその意味の系譜におけるチェルヌィシェフスキーの規定の位置づけについて多少言及しておこう。

いわゆる「余計者」の最初のタイプは、しばしば言われるように、20年代において当時の貴族社会の現状に満足できず、さりとてデカブリストの運動に加わることもできなかった貴族知識人に特徴的なタイプであるオネーギンであった（A. C. プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』1823-1831）。40年代が近づくにつれて、ただ幻滅と深い憂うつとり

41) Ч., V, 159-160.

42) Ч., V, 160.

こであったオネーギンに代わって活動への希求にあふれるペチョーリンが登場する。だがその希求は現存貴族社会の礼儀やしきたりへの反撥ではあっても、その目指す社会的方向はきわめて漠然としたものであった (M. Ю. レールモントフ『現代の英雄』1839-1840)。それに続く40年代の「余計者」ベリトフは、ペチョーリンの無目的な行動への希求に代わって、官吏、選挙、医者などさまざまな社会的に有用な仕事を追求し模索し、とりとめなくついでにゆく段階のタイプといえよう (A. И. ゲルツェン『誰の罪か』1841-1846)。その結果未来社会を語り治水工事や農業改革を考えるほどに社会意識が成長し、希求の社会的方向が頭のなかでは定まってきたにもかかわらず、こんどはかえって行動への確信の点で欠けるルーヂンが登場する。この欠如の側面は、ドブロリュエボフによって「社会そのもののなかに本当の仕事の要求が現われた」といわれる60年代にかえってその反動として登場してきたいわゆるオブローモフ主義の傾向の先駆けである (И. А. Гончаров『オブローモフ』1859)。このような「余計者」貴族知識人は、61年の農奴解放に対する農民の蜂起、63年のポーランド反乱などの「困難な時代」にすべて温順化し無用化してしまい、やがて平民型「余計者」、つまりいわゆる「幸福な小市民」に席を譲ることになる (B. A. Срепцов『困難な時代』1865)。

チェルヌィシェフスキーによる H. H. の性格規定は、上述のうちのルーヂンの段階に位置づけられるように思われる。もっと正確に言うならば、社会的理想にあこがれながら行動において鈍感、臆病であるルーヂンの消極的な側面を表わすもののように思われる。その点でオブローモフの原型といてよい。チェルヌィシェフスキー自身も、トゥルゲーネフの主要な主人公たちに対する C. C. ドウドゥィシキン⁴³⁾の否定的見解を反駁した、ある雑誌についての覚書⁴⁴⁾のなかで、それらの主人公たちをオネーギンやペチョーリンの単なる「引写しのヴァリエーション」にすぎないとする見解に対して、オネーギン、ペチョーリン、ベリトフ、ルーヂンのあいだには、すなわち「社会的発展の四つの異なる時代のこれら四人の人々のあいだには類似は全くない」とし、かれらのあいだの相違を「かれらが属している時代の性格によって」⁴⁵⁾示そうと試みた。かれによれば、オネーギン、ペチョーリン、ベリトフ、「これら三つのタイプは理想として描かれた。ルーヂンは理想として描かれたのでは全くない」⁴⁶⁾しかし、かれが注意するのは、このような作家の方法上の違いだけにはとどまらない。さらにかれは、「ルーヂンはペチョーリンとオネーギン以後何ひとつ新しいものを代表していないと、いったいどのようにして言うことができたろうか。かれにおいてはすべてが新しい。かれの思想からかれの行為にいたるまで、かれの性格からかれの習慣にいたるまで」⁴⁶⁾と反論さえしている。

前節に掲げた「だが作家がその主人公のことで誤ったというのはたしかであろうか」という問いに対する、チェルヌィシェフスキーの答えは、したがって、作家は誤りを犯さなかったばかりでなく、当時の「余計者」を見事に描くことに成功している、ということである。

43) Ч., IV, 696-708.: Заметки о журналах, <Из №2 «Современника» январь 1857>

44) Ч., IV, 698.

45) Ч., IV, 699.

46) Ч., IV, 699.

V

さて、以上のような「余計者」H. H. によってアーシャのこうむった不幸はどのようなものであったか。これが次の論旨展開の糸口である。その不幸をひき起こした責任は、果たしてもっぱら H. H. の側にあるのであろうか。それとも、アーシャの側にもあるのであろうか。あるいは、このようにだれかれの罪として問責できるものなのかどうか。チェルヌィシェフスキーはこれらの問いをアーシャ、H. H.、アーシャの兄ガーギンのそれぞれの側に即して吟味してゆく。その際、展開のパースペクティヴとして、かれは、ひとまず過激な個人問責から穏健な社会慣習肯定に移るプロセスを通じて、前方に人間における不幸と罪の問題を予想している。かれのことばを使えば、「わたしは、何のためにも、また何においても人々をとがめるべきではないという指摘から始める」⁴⁷⁾ したがって、ここでの論旨展開はさきの「愚かでない人々」に対して、穏健な「思慮深い人々」の立場の内面的批判と見なしてよいであろう。

まずアーシャの側における不幸は、単にあいびきの「決定的瞬間」に H. H. がたじろぎ、そのうえ腹をたてて彼女を責めたことによって傷つけられた不幸にはとどまらない。チェルヌィシェフスキーによれば、アーシャの本当の不幸は「よりふさわしい男性にほとんど出会わないだろうということにある」。そして「わがロメオが実にロシア社会の最良の人々のひとりであり、ロシアにはかれよりよい人間がいないというところにアーシャに対するわがロメオの関係の悲しい喜劇性がある」⁴⁸⁾ しかし、多くの読者のアーシャに対する愛着にもかかわらず、思慮深い穏健な立場からするならば、彼女の側にも問われるべきいくつかの過失がある。それは多くの人々が、こんどはアーシャに対して発する非難の声であり、それには「思慮深い人々」の議論によって理由づけさえできあがっている。すなわち「若者にランデ・ヴーを約束するとは！ きっと身を滅ぼすにきまっていますよ」とか、また「自分のことなら勝手だが、何だって他人を不愉快な目に合わせるのか。……もし彼女の言うことを聞いたら身を滅ぼすだろうし、聞かないなら臆病者呼ばわりをされ自分を卑しめるだろう」。さらにまた兄ガーギンの受身の立場からすれば、「その妹からどんなに苦い丸薬をすすめられたことか、一生かかっても呑みくたせはしない」。したがって、「わたくしは彼女の行為や性格を高貴であるとは呼ばないでしょう。なぜなら軽率に厚かましく他人を傷つけるような人を、わたくしは高貴とは呼ばないから」⁴⁹⁾ さきに行動においても高貴であったアーシャは、いまや逆転してその気品を引き下げられる。

アーシャを問責し非難することは——さきにその逆がそうであったように——とりもなおさず H. H. を正当化し弁護することになる。そしてチェルヌィシェフスキーによれば、こうした弁護論こそが実にさきの H. H. に対する過激な個人問責から穏健な慣習肯定の立場に移る橋渡しをなすものである。自由奔放なアーシャの言動に魅せられて多くの読者が H. H. に対して放った鋭い非難は、ロシアの現実の根強い慣習の立場から、きわめて非現実的な理由のない非難とされるのである。すなわち、「あなた方はかれのことばがきびし

47) Ч., V, 162.

48) Ч., V, 160.

49) Ч., V, 161.

いことに腹を立て、そのことばを不作法だと呼んでいる。だが真実も常にきびしいものであって、もしも何の罪もないわたしが不愉快な事件に巻込まれ、しかもその引込まれた不幸を喜ぶようにしつこく求められたとき、わたしの口からきびしいことばがとび出したとしても、誰がわたしを非難できるであろうか。⁵⁰⁾ このように、ここでのチェルヌィシェフスキーは、きびしい現実立脚するという点では、一見理想主義的な個人問責型の考え方よりも穏健な現実主義の方を重く見ているように思われる。こうした穏健現実派の立場からするならば、ロシア貴族知識人の代表である H. H. を西ヨーロッパの英雄的行動性に欠ける点で気に入らないからといって非難するように、「一般に自分に気に入らないことを非難し始めるやあなたはイデオログになる。すなわち、あなたは世のなかで最も滑稽な、実は最も危険な人間となり、実践的現実の堅固な支えを足もとから失う」のである。このような立場からすれば、「自分の意見において実際的な人間になるように努めよ。そしてまず……わがロメオとでも協調するように努めよ」⁵¹⁾とやっている。換言するならば、西欧の文化を取り入れ西欧人のように振舞おうとする「教養ある人々」に対して「外国では人々がどのように行動したか、またどのように行動しているかについてあなた方はたくさんものを読んだ。だがそれが結局は外国のものであることをよく考えなさい」という「穏健な人々」の立場である。⁵²⁾ つまりロシア人が西欧風に振舞うのは滑稽だというわけである。チェルヌィシェフスキーはこの立場を、イギリスとロシアの話しことばの使い方の違いなどの例で説明している。

さて、もちろんチェルヌィシェフスキー自身は上述のような穏健現実派に甘んじているわけではない。その現実的な考えを一段とすすめて小説の末尾の H. H. の振舞いの与えるやるせなさの正体を分析してゆく。その分析の積極的な方向を大づかみに言うと、それは罪 (вина) と不幸 (беда) との区別を前提として、個々人の罪を罰してゆくのではなく共通に陥っている人間の不幸の現実的な社会基盤を変えてゆくべきだという方向である。さらにつけ加えて言うならば、罰する立場の現実暴露告発的なリアリズム——これはいわば胆汁質メランコリーのリアリズムである——から実際的現実改革のリアリズムへの方向である。その分析の順序は、いたって廻りくどい——いい意味でも悪い意味でも哲学的な——やり方をしているので、以下にそれを整理してみよう。

(1) どんなに利口でどれほどエネルギー的な人間でもどうしても抜け出せない制約とか振切ることのできない重りになるような鈍感さがある。また、だれでも社会的なしきたりにしばられるものである。「なみの人々のあいだでは復活祭に卵に色をつけ、謝肉祭に布林を食べるならわしがある——そしてある人が色つけ卵を全く食べず、ほとんどの人が布林はもたれると訴えるにしても、みなこのようにする」。⁵³⁾ このような些細なことだけでなく、万事がすべてこうなのである。例えば、教育に関して少年は少女よりも自由に育てるべきであるということになっており、どの父母もこのような差別の非合理性を知っ

50) Ч., V, 162.

51) Ч., V, 162.

52) См. Ч., V, 162.

53) Ч., V, 163.

「ランデ・ヴァーにおけるロシア人」考

ていても、この規則に従って子供たちを育てることがならわしになっている。また富に関しては、年収1万ルーブリと2万ルーブリとでは、人間の本質的満足からしても虚栄心ということからしても、たいした違いはないのに、人間は2万ルーブリをほしがる。これも社会的しきたりである。こういうしきたりにしばられる人間のあり方は、人間の思想、考え方によく表わされている。すなわち、その例として次のように述べられる。「ある人は、その思想形態がその属している社会から独立しているように見えるので、初めはあなた方を当惑させることであろう。例えば、かれはコスモポリタンとか階級的の偏見をもたない人間とか等々と見えるであろうし、自分の知合いがそう思うのと同じように自分自身でも自分をそうした人間だと本気で思っている。だが、コスモポリタンをもっとよく観察しなさい。そうすればかれがそのパスポートにするされている国籍に特有な考え方と習慣のあらゆる特殊性を身につけたフランス人かロシア人であることが分かるであろう」。国民性ばかりではない。「かれの社会層に特有な考え方のあらゆる陰影をもった地主あるいは官吏、商人あるいは教授であることが分かるであろう」。⁵⁴⁾

(2) 次に、このように同じ境遇は重要な点で人間の形成に大きな差異を生まないものだという観察が、さらに拡張される。そしてチェルヌィシェフスキーは、「各々の人間は、あらゆる人間と同じく、あらゆる点で、他人と全く同じである」という一般的な結論に到達する。だが、そのためには、重要と思われる差異が実はただ表面的なものであるが故に眼につきやすいものであり、その現象、あらゆるの差異のもとに全く同一のもの、本質がかくされていることを発見しなければならない。この命題を裏づけるために、チェルヌィシェフスキーは、植物や動物、生物界全体の話としてフォイエルバッハ的に、すなわち生物学的-人間論的に議論をすすめてゆく。まず、「形態の外的な差異のもとに、猿とくじら、わしとにわとりなどの生物体には内的な同一性があり」、哺乳類、鳥類、魚類には生物体としての構造機能のうえでのアナロジーがあり、そこにあるのは形態上の違いだけである。「うじ虫には鼻やのどや肺がないとはいえ、そのうじ虫でさえ哺乳類と同じように呼吸していることが分かるであろう」。⁵⁵⁾ これは単に動物界のことにはとどまらない。「各々の人間の精神的な生活においても基本的な原理や動因が同じであることを認めないならば、他の存在との類比が破られるだけでなく、人間の身体的な生活との類比もまた破られるであろう」。⁵⁶⁾ その例証としてチェルヌィシェフスキーは、年令、健康、気分と脈膊との関係を挙げ、「そこでも明らかなことは差異は生物体の構造にあるのではなくて生物体が観察される際の状況にある」と述べ、「ピョートルも、もし一杯のシャンパンを飲むならばイワンと全く同じように脈膊が強くなるであろう」などと面白いことを言っている。⁵⁷⁾ かれは、ついでにこのようなあらゆる人間の同一性の確信が、対人関係のうえで他人について憤慨したり問責したりすること、および自分に対する良心の苛責や自責の念を消去させて慰めをもたらすという利益についても言及している。すなわち、「その心の静けさよりもいっそう快いのは、ただ『オムマニ・パド・メ・フム』ということばを絶えず静かに

54) Ч., V, 163.

55) Ч., V, 164.

56) Ч., V, 164.

57) Ч., V, 164.

くりかえすバラモン教の鼻先の瞑想だけであろう」。⁵⁸⁾ しかしここでかれが言おうとしていることは、その人間本性の同一のテーゼがもたらすさまざまな精神的実際的利益のことよりも、そのテーゼが「純粹に科学理論的な重要性」をもっていることであり、それこそが「人間の賢さの限界」だと言明している。

(3) 次の問題は、それでは人間の行ないの違いはどこから生ずるのかということである。それに対するかれの答えは、「すべてのものは社会的習慣と環境に依存している。すなわち、究極的にはすべてのものはもっぱら環境に依存している。なぜなら、社会的習慣もそれはそれで同じく環境から起こったものだからである」。これはさきの同じ構造の生物体における差異が状況に依存していたことに照応する。

(4) ここまできて、初めてわれわれは、「ある人間を責めるときに……その非難することでその人間に罪があるのか、あるいは環境や社会の習慣に罪があるのか」⁵⁹⁾という問いを立てることができるようになる。われわれはしばしば、実はある人間の罪ではなくてかれの不幸であるかもしれないのに、その人間のあらゆる不幸をかれの犯した罪として非難しがちである。ところが「罪と不幸とは全く異なったものであり、おのずから全く別の取り扱いを必要としている。罪はある人物に対する叱責あるいはさらに罰を招来する。不幸はかれの意志よりもさらにいっそう強い環境の排除を通してその人物を助けることを必要としている」。つまり、「必要なのは、個々の人物を罰することではなくて、階級全体のために生活条件を変えることだ」⁶⁰⁾というわけである。チェルヌィシェフスキーはそのテーゼを、ある例外的に狂暴な裁縫師の「罪」の例や祭りに通例行なわれる職人たちのなぐり合いの「不幸」な例を挙げて説明している。

(5) それでは、罪と不幸の区別の徴表はいかなるものであろうか。それには二つある。すなわち、その第一は、「罪は稀であり規則の例外である。不幸は流行病である」⁶¹⁾ということである。第二は、「不幸は、その不幸に導く条件を充たすところのまさにその人間自身にふりかかる。罪はその罪を犯した人間には利益をもたらす、他人におそいかかる」⁶²⁾ということである。例えば、強盗は自分の利益のために他人に害を加える罪を犯すものであるが、これに対して、誤って人を傷つけたためにみずから不幸に悩む不注意な狩人は罪人ではなくて不幸な人である。ところがチェルヌィシェフスキーはさらに論を進めて、その第二の徴表をさらに深く適用してゆくなれば、その強盗の例についても、それは普通生活の苦しさから出たものであるから、「罪は世のなかには殆んど全く存在しないのであって、ただ不幸だけが存在する」⁶³⁾という結論になると述べている。

チェルヌィシェフスキーは、以上のようなまわりくどい議論を行なったあとで、またふ

58) Ч., V, 165. なお「オムマニ・パド・メ・フム」というのは、ネパールとチベットの仏教徒の呪文で、神に向けられたものであって、この呪文をとるものはあらゆる危険から予防されるといわれた。

59) Ч., V, 165.

60) Ч., V, 165.

61) Ч., V, 166.

62) Ч., V, 166.

63) Ч., V, 166.

たたび『アーシャ』に立ちかえる。できるなら誰でも幸福な愛のお互いの快樂を楽しむ方がずっと快的であったであろう。まちがえて人を殺した狩人のように、H. H. はあとで自分を責めているが、やはり H. H. もお互いの楽しみの方をとりたかったであろう。アーシャは拒絶されてきびしい不快さを受け、このことは H. H. 自身にとってもあらゆる道徳的苦悩のうちで最もきびしいものをもたらしている。したがって、さきの罪か不幸かの基準に照らしていえばこれは罪ではなくて不幸なのである。そして、月並だとかつまらない振舞いだとかいわれるかもしれないけれども、「最良の人々」は誰でもこういうことをしているのである。これはわれわれの社会に根づいている「流行病の兆候」なのである。責めたとて何の甲斐もないことである。要するに、ロシアの社会的環境から生まれた「最良の人々」の生活習慣に見られる「流行病の兆候」——月並な卑劣さによって人を傷つけながら、そのためにみずからを責めて苦悩する——に巻込まれた、H. H. の不幸な姿が指摘されているわけである。これまで述べてきたことをまとめていうならば、アーシャの悲恋の悲しみは、ただ H. H. との関係における失恋の悲しみに尽きるものではなくて、悲恋以外の恋愛をなしえないことにあり、他方 H. H. にとってもその悲恋の悲しみが、失うまいとして失わざるをえない、恋の必然的な悲哀であったことである。

ところで、チェルヌィシェフスキーは次いで「病気の兆候は病気そのものではない」と断わって、あのしばしば引用されるノートリアスな文節を述べる。すなわち、「エロティックな問題などどうでもいい。行政的、司法的改善、財政的改革、農民解放の問題にたずさわっているわが時代の読者はそれどころではない」。⁶⁴⁾ 例えば、E. H. カーは、この章句を引いて、「両性間の肉体的関係を上品な雲のなかに包み隠す」、「ヴィクトリア朝時代の小説家」と共通するチェルヌィシェフスキーの特徴の一つをそこに見ている。⁶⁵⁾ チェルヌィシェフスキーの作品にヴィクトリア朝文学の特色が見られるということは、例えばかれの小説『何をなすべきか』(1863)のなかに饒舌な説明やながたらしい議論が挿入されていることを理由にしてその他でも指摘されているところであるが、いま特にさきの個所をその典拠に引くことは不適當なように思われる。なぜなら、ここでチェルヌィシェフスキーは、貴族知識人 H. H. の行動のうちに病気そのものとしてのエロティシズムを見ているわけではなく、単に恋愛問題にとどまらず広く一般の関心事であった政治＝社会問題へのかかわり合いにおいても現われる貴族知識人の「病気の兆候」を認めているからである。したがって、この個所の解釈としては次の M. П. ニコラーエフの方がいっそう穩当であり、のちに述べる G. ルカーチの記述はさらに深い理解を示している。すなわち、ニコラ

64) Ч., V, 166.

65) E. H. Carr, Introduction (1960) in: Chernyshevsky, *What is to be done?*, New York, Vintage Books, 1961, p. xiv. なお、ブルソフは本稿中のチェルヌィシェフスキーからの引用個所に直接関連して「ここでチェルヌィシェフスキーは、トゥルゲーネフの小説『アーシャ』の主題は、小説の主人公の個性を全面的に考察する可能性をあたえないと卒直に言明している」と解している。См. Б. И. Бурсов, Вопросы реализма в эстетике революционных демократов. なお Бурсов, Мастерство Чернышевского-критика, 1956, стр. 249. にも同様の指摘が見られる。しかし、実はその引用個所のコンテクストから明らかなように、チェルヌィシェフスキーは『アーシャ』の主題を「エロチックな問題」と捉えていないばかりか、かえってそれを否定する意図を含んでいる。

ーエフによれば、「……だが批評家〔チェルヌィシェフスキー〕はかれ〔ロメオ〕にあてて怒りの罵倒演説を浴びせようとは思っていない。かれの行為のなかにチェルヌィシェフスキーは『わが社会に根づいている流行病の兆候』を見いだしたのである。//病いのしるしは、愛情の問題において示されているだけでなく、それは行政改革を、とくに農民問題の解決をおくらせている」。⁶⁶⁾ 問題点の所在に強調を置くルカーチの表現によれば、「……それはただ、ここぞという緊急焦眉の瞬間に、政治的決断を規定するのと同じ力が、労働であれ、恋愛であれ、結婚であれ、なんであれ、要するに日常生活のありとあらゆる現象のなかにもはたらいっている、ということを行っているのだ。その方向、内容、程度はさまざまではあっても、その性格を示す特徴だけは、生活の、またあらゆる人間活動のすべての領域で、同じ調子であらわれてくるような一定の人間タイプ、そういうものが、どんな時代にもあるものである」。⁶⁷⁾ しかも、以上に明らかなように、わが悲恋のロメオ、不幸な H. H. に表わされているこのような「一定の人間のタイプ」を自己の内面のものとして内在的に分析し批判してゆこうとするところにチェルヌィシェフスキーの意図があったのである。

VI

したがって次の論旨展開を生み出す問いは、このように立てられる。「なぜわがロメオは不幸に陥ったのか」、そして、それが明らかになれば「かれに似たわれわれすべては、他のいっさいの事柄においても自分から何を期待し、自分のために何を期待すべきかが分かるであろう」。⁶⁸⁾ この問いこそ、社会慣習を重んじるいわゆる穏健な思慮深い立場をわがものとしてきたチェルヌィシェフスキーの自己告発の自問にほかならない。

H. H. の陥った不幸な状態、この「病気の兆候」の主なものは、一口で言えば、「めくらのような愚鈍」、つまり起こっている事柄が見えない鈍さである。チェルヌィシェフスキーは H. H. のこの鈍さの「兆候」をアーシャの暗示的な愛の告白に対するかれの感受性の鈍さのうちに見て、小説『アーシャ』の6章から13章までのいきさつを、その視点からまとめている。その鈍さは、まずアーシャの言動を読みとれない鈍さとして、次いで自分のうちに起こっていることを読みとれない鈍さとして両面から説明される。例えば、アーシャのローレライの話にことよせての、あるいは愛の「翼」に託しての暗示的な愛の告白、他の女性関係に対するアーシャの不安のことばなどがひそかに含意するものについて、H. H. は何も感じとれない。チェルヌィシェフスキーはこのような H. H. の鈍さにいらだったように、「これが分からないなどは実にありえないことだった。だがかれは事実何も理解しなかったのだ」と言っている。あるいは喜びや快さとして多少は感じられたかもしれない。しかしその場合にも、「かれは自分自身の心のなかに起こっていることを理解したのだろうか」。⁶⁹⁾ 一時期ガーギンとアーシャの、兄妹の間柄をやや越えたむつまじさを垣

66) М. П. Николаев, Указ. статья, стр. 355. 角括弧内は筆者挿入。

67) G. ルカーチ, 前掲書, 第6巻, p. 182.

68) Ч., V, 166.

69) Ч., V, 167.

間見て、本当は兄妹ではないのではないかと疑って嫉妬し、もうアーシャと会うまいと一方では思いながらもアーシャと会わずにはいられないというように、心が千々に乱れ、数日野山を一人でさまよひ歩く。しかし、ガーギンから母親ちがいの兄妹であることを打ち明けられて、歓喜の涙を流したりしている。普通なら自分のなかに起こっていることを理解するはずなのに、なかなかその理解が定まらない。アーシャからあいびきのメモを受け取りその文面によってアーシャの気持をはっきり教えられる。しかしそれにもかかわらず、社会的行動としてそれにどう対応すべきかが一向に分からない。「かわいそうに！ 30歳にもなって年がいもなく、いつ鼻を拭くべきか、寝るためにいつ床につくべきか、お茶を何杯飲むべきかを教えてもらおう子守をもたなければならぬとは。」⁷⁰⁾とチェルヌィシエフスキーは叫ぶように付けたしている。

しかしもはや胆汁気質の問責のいらだちを乗り越えたかれは、⁷¹⁾「ロメオのこの信じられないほどの鈍さはいったいどこから生まれてきたものなのか」と冷静に自問し、「その鈍さを生み出した罪は二つの状況のうちにある」⁷²⁾と自答して、次のように説明している。すなわち、まず第一は、日常的なことを越えた「偉大なもの」、しかも書物や頭のなかだけでは「生きたもの」を理解することになれていない、こうした生活のあり方にある。第二は、幅広い決断、危険を犯さねばならぬ行為に対して無力であること、これはその生活が些細なことにだけなじんで、その狭い枠を容易に越えないからである。ひとり H. H. だけに限られたことではない、当時の貴族知識人のあわれむべき不幸な姿が、このようにしてかれらの置かれた生活状況のなかから生彩のある筆致で描かれる。そこには「即物的、告発的」文章に伴ないがちな狭い怒りや恨みはもはや消え、心広く現実を観察してゆこうとする余裕や楽しささえも感じられる。チェルヌィシエフスキー自身がこの論述において意識的に自分の課題にしているように思われる「純粹に科学的、理論的な」取り扱いに沿って、やや堅い表現をとるならば、以下個条に分けて紹介するかれの論述は、まさに当時の貴族知識人に共通な生活形態およびそれに規定される価値意識の形態の分析にほかならないといえよう。使われる多くの比喩は、次節に述べる最後のキリストの「譬」につながってゆく、少なくとも文体上の伏線的な引喩と解される。

(1) H. H. の属する社会層の人々は「一生涯、銀コペイカの半分でエララッで遊ぶ人に似ている」。こういう人は小銭で遊ぶことには強いかもしれないが、千ルーブリの勝負遊びになると、賭金の大きさにおどおどして技巧がすべて狂ってしまい、「最も拙劣な手を使って、おそらく手持ちのカルタを持ちこたえることさえできないであろう」。別の例で言えば、クロンシュタットからペテルブルクまでの河口の浅瀬をブイをたよりにして舟をあやつる水夫が大洋のなかに出たときに似ている。このきびしい分析は H. H. に対する個人的非難ではなくて、かれの出入りする交際仲間一般に当てはまる。この社会の人々の一見紳士風のフロックコートとか燕尾服、口ひげだのあごひげだのは、まどわしにすぎない。「市民的事業への独自の参加に対する習慣を身につけることなしに、市民感情を身につけることなしに、男の子供はどうか中年の紳士となり、やがて初老にさしかかるが、

70) Ч., V, 168.

71) 「胆汁質」に関しては前注 28) 参照。

72) Ч., V, 168.

一個の男性にはならず、あるいは少くとも高貴な性格をもった男性にはならない」。⁷³⁾ チェルヌィシェフスキーは、人間の成長において社会的な活動が不可欠なことを繰り返えし強調し、そして市民的モチーフが欠如するならばあとに残るのは自分のふところかげん、腹工合など個人的な狭い心配だけである。その結果として、また、ホフマンの小説のなかの人物のように、モラルや愛情、友情のような偉大なものへのセンスを失って、男性はすべて臆病者や陰謀家になり、婦人はみなコケットになってしまう。チェルヌィシェフスキーは、これはつまりドイツで言う小都会人性クラインシュテットライに当たるものだと述べて、「いかなる社会においても社会的な仕事についての話がなくなるや否や会話がどんなものになるかを考えてみよ」と言っている。あることないことの無駄話、月並な毒舌、軽薄なおしゃべり以外には何もない。さらに、かれは「このような交際仲間における生活によって育成された人間を想像してみよ」とつづけ、美しい偉大なことを経験しなかったものは、それらについて何も理解できないだろう、と結論づけている。(2) もっとも、美しい偉業について書物のなかで読み、それらについて考え、しかもそれらがこの世にも存在すべきだと信ずることは、できるかもしれない。普通そう考えられている。しかし、よく泡立つワインをシャンパンだといって贈られていて、生きた現実の本当のシャンパンを贈られたとき、これは模造品だといいかねないのに似て、小さな事柄の比較にはたけていても偉大な事柄が現れたときに、それを推量し理解することはむずかしいのである。(3) さらにチェルヌィシェフスキーは、意志に関して、⁷⁴⁾「見解の広さ、狭さによって決意も広くなったり狭くなったりする」⁷⁵⁾ことを指摘し、しかもその狭さは、笑いやあくびが伝染するように、社会生理学的な伝染性をもつことに注意している。ここで、びつこと片目の国にやってきたある五体健全な人間の寓話を敷衍した明快な説明が挿入されるが、やや長いので割愛せざるをえない。⁷⁶⁾ だがその説明の要点は、物事に対する個人の知的見解だけでなく行動における意志に関して、「小さな、その日その日の勘定以外にはなんの志向ももたない社会に住む者は、意志の小ささを身につけざるをえない」⁷⁷⁾つまりみずから意志せず——つまり欲すると欲せざるとにかかわらず——小さな意志をもたざるをえない、ということである。この意志のあり方は、前述の罪と不幸との区別にかかわっている。すなわち、「タールに触れるものは黒くよごれる。もしも故意に触れたならば、罰として、もしも故意でなければ、不幸にも」。⁷⁸⁾ これは、故意に罪を犯して罰を受けようと思う者がいないとしても、人はみなその意に反して不幸であることを示している。つまり、個々の人の主観的な善意や自己釈明にもかかわらず、皆が共通に陥り、強いられている不幸な状況の指摘である。この共通な不幸の状況の変化や変革のために、少しでも異常なことへ踏み出さなければならぬときには臆病になり、まだ踏み出すときではないとか、踏み出すことは誘惑にすぎないと

73) Ч., V, 168-169.

74) チェルヌィシェフスキーは『哲学の人間学的原理』のなかで「意志とよぶ現象は原因によって結び合わされた一連の現象と事実との一環である」といい、意志のあらわれの直接の原因は思想にあるとして、「思想が然々でなければ、意志も然々でなくなる」と述べている。См. Ч., VII, 261.

75) Ч., V, 170.

76) Ч., V, 170.

77) Ч., V, 170-171.

78) Ч., V, 170.

か、故意に自分に思いこませて、踏み出すべき瞬間の存在すら否定しようとする。これは、たとえていえば、ちょうどお化けをこわがる子供がお化けなんかいないんだと叫んで自分を勇気づけるのに似ている、とチェルヌィシエフスキーは言う。かれによれば、小説『アーシャ』の末尾における H. H. とアーシャとの運命の「決定的瞬間」、およびその場面における H. H. の不幸な臆病さの由来は以上のようなものなのである。

H. H. に代表されるロシアにおける「最良の人々」すなわち貴族知識人の生活基盤、行動様式および価値観についての、上述のような分析をふまえて、いまや冒頭に紹介されていた「多くの読者たち」の読後感がみごとにくつがえされる。あからさまな悪党よりもまだ悪い、H. H. のあいびきにおける無神経な不作法によって傷心の別離を余儀なくされたアーシャへの愛惜や、教養のかげにかくれた H. H. の臆病さに対する問責、ひいてはそのようなやるせない結末に終わらせた作者トゥルゲーネフに対する非難、これら「多くの読者たち」の感想に対して、チェルヌィシエフスキーは、いまやはっきりと次のように言う。「われわれはアーシャに少しのあわれみをも感じない」。H. H. との訣別は鈍感で無分別な人間からの訣別であって、それは「彼女にとってむしろ幸いなことであった」。真に「アーシャに同情を寄せるものは、重苦しい不快至極なシーンを喜ぶべきである」。⁷⁹⁾ そのう えいまや貴族知識人の各々の罪過に対する胆汁質の個人的問責は、かれらの不幸に関する広い科学的知見にかわっており、トゥルゲーネフのリアリズム作家としての功績に対する評価が——作家論、作品論としては故意にさし控えられたとはいえ——なお強く余韻を残している。そこに見られるのは、道徳主義的な個人問責と現実肯定的な慣習追従との両方を乗り越えた立場である。チェルヌィシエフスキーはそれを、フォイエールバッハ原理による実践の理論的理解を試みることによって、かち得ようとした。その試みはその後のかれの著作活動に引き継がれている。

すなわち、一定の社会の諸階層に属する人々の価値観や認識のあり方をその社会生活の状況から説明しようとする以上のような試みは、その後も『哲学の人間学的原理』(1860)などにおいていっそう理論的に展開される。ここでは、そのなかから、かれが「社会改革の変革に直面した西欧の富裕層の良心的な人々のもつ感情の代表者」としてのミルと「西欧の庶民の精神的状態を代表する」桶屋の息子プルドンとを比較対照している個所に触れるだけにとどめたい。「かれらは二人とも、西欧社会の一定の階層の思想の状態を知ろうとする人には、きわめて重要である。ミルからわかることは、西欧の特権階級の良心的な部分が、ある思想の理論的公正を自らも擁護し、論理的にも抵抗できないし、社会的にも有益であると認めながら、それが自分の階層に不利益となると、その思想の実現をみて混乱するということである。『正義について』の著者は、変革を熱望する庶民が、ふるい概念で教育され、かれの要求にふさわしい見解を知らぬために、変革の実現にあたって難儀しているということを示している」。⁸⁰⁾ ここで言われているミルにおける「混乱」は、さきに言われたあいびきにおける H. H. の困惑に当たるものであり、また庶民がやがてもつ新しい見解は庶民の生活状況のなかからのみ生まれるものであることが示されている。別

79) Ч., V, 171.

80) Ч., VII, 239. 松田訳『哲学の人間学的原理』pp. 33-34 参照。

の表現を借りれば、「ブルードンの思想のなかに何か新しいものがあるのは、かれの思想が学識者の属する階級のかつて経験しなかった生活のなかから生まれたからである」。⁸¹⁾このような事情を見ると、チェルヌィシェフスキーの『アーシャ』論が、約5年前のかれの学位論文⁸²⁾から『哲学の人間学的原理』にいたるフォイエルバッハ原理にもとづく全般的な理論形成に裏づけられていたことがよく分かるのである。

VII

小説『アーシャ』にことよせての、「ランデ・ヴー」における H. H. 型のロシア人、すなわち下からの農民革命に際会したロシア貴族知識人の言動の実態についての客観的な分析は、ほぼ以上のとおりであった。実態分析だけが目的であったのだとしたら、これですでに結論に到達しているといつてよいであろう。ところがチェルヌィシェフスキーは最後に、H. H. の所属する社会層に自分の所属する社会層——それは、H. H. との悲痛な訣別が実は真の幸福であったという意味においてアーシャに同情を寄せる社会層である——を対置させて、そのような「われわれ」の立場から、いわば“政治的な”忠告を与えている。しかし、それは敵対するリベラルに対してデモクラートが外から与える党派的な警告とか党派間闘争における対話ぬきの最後通牒とかいったものではなく、期待がうすらぎながらもなお希望を捨てきれないような立場からの切々たる忠告である。そればかりでなく、かれらに託す希望を——もしそれが幻想ならば——捨てるためには、かえって「われわれ」のうちにおけるかれらと共通した思想や情感をみずから乗り越えねばならぬ、苦渋に満ちた忠告である。その点いわゆる一般の政治的忠告の幅をはるかに越えている。

ところで、この忠告の意味するものをどうとらえるべきかに関しては、少なからず問題がある。というのは、この『アーシャ』論と前後して書かれた「ルイ 18 世およびシャルル 10 世治下のフランスにおける政党の闘争」において、すでに、リベラルとデモクラートとの敵対的性格に触れて、「リベラルとデモクラートとでは根本的な願望、基本的な動機が本質的に異なっている」⁸³⁾と述べられており、これと直接に結びつけて、問題の「忠告」を、実は貴族リベラル派に対する絶縁状であったとみなす解釈が以前から広く行なわれているからである。例えば 1950 年に E. エフィーモヴァはチェルヌィシェフスキーの『アーシャ』論を「ヒューマニズムと人民愛のマスクをかぶった」反人民的なリベラル派の本質暴露と見なし、⁸⁴⁾ 1953 年に K. バニェーツキーは「フランスにおける政党の闘争」を援用して、リベラルとデモクラートとの「連帯の不可能」を主張したものと解釈し、⁸⁵⁾ 1956 年に B. ブールソフは同様に「政党の闘争」と直接結びつけて「リベラルと革命的民

81) Ч., VII, 236. 松田訳, 前掲書, p. 29 参照。

82) 拙稿「チェルヌィシェフスキーの美学理論(I)」『スラヴ研究』No. 13, 1969, pp. 106-108 参照。

83) Ч., V, 216.

84) E. Ефимова, Указ. статья, стр. 158. エフィーモヴァの論証のうちには『アーシャ』論からのかなり粗雑な引証がなされている。

85) К. И. Бонецкий, Вступ. статья к. сб. «Тургенев в оценке русской критики», М., Гослитиздат, 1953, стр. 34.

主義者との断絶」と「革命の近親（アーシャを生んだところの家族）および革命の敵対者（ロメオの出身家族）」とを平行的に扱い、両者の政治党派的对立が決定的に示されていると理解している。⁸⁶⁾ もちろんチェルヌィシェフスキーが歴史の変革力を「平民大衆」に見ていたことは、2年後の論文「7月王政」中の次のことばでも明らかなように、まちがいのないところである。すなわち、「あれこれのフランス政府がもっていたところのすべての力の源泉は、政府が大衆にとって有利であるという大衆の期待であった。大衆の現状に対する不満はつねに破局の原因であった」。⁸⁷⁾ 問題は、その大衆の立場に立つチェルヌィシェフスキーが、上記の解釈のように「平民大衆」に敵対し、連帯することのありえないようリベラル貴族知識人に対して、なにゆえ、また何のためにあえて忠告を与えたか、ということにある。ブルソフはそれを忖度し比較的くわしい推察を行なっている。まず「チェルヌィシェフスキーの側からのリベラリズム批判のあらゆる仮借なさにもかかわらず、そこには寛大さの調子も聞かれる。これは——真の革命家の寛大さであり、革命家にとっての信念の方法であり——偉大な目的の達成のための最も重要な手段の一つである」。⁸⁸⁾ つまり、忠告が相手に聞き入れられると期待することができない場合にもあえて忠告することが、革命家にふさわしい方法だというのである。⁸⁹⁾ 次に「ただ検閲のために、チェルヌィシェフスキーは、自分の考えをすっかり表現することを妨げられたのであり、自由主義的地主たちが問題の『分別ある』解決の道を拒絶し、『無分別に』振舞い——ロメオのように、すなわち革命の敵としてとどまっていると声明することを妨げられた」。⁹⁰⁾ つまり、拒絶されることを見通しての忠告というイソップのことばによる逆説だというのである。⁹¹⁾ 『アーシャ』論においてチェルヌィシェフスキーがリベラルとデモクラートとの党派の連携の政治的是非の問題を意識していたか、いな、それよりも前にそもそも当時のロシアにおいてリベラル派が党派として政治的な一勢力を形成しており、それとの連携に関する革命家の方法いかに現実的な問題たりえたかどうか、わたくしはよく知らない。『アーシャ』論直後から1、2年にわたって矢継ぎばやに書かれた西欧の政治諸勢力の分析によって、チェルヌィシェフスキーは、平民が独自の「獲得目標」を定めて自立的な運動を形成する必要があること、⁹²⁾ 穏健共和派との形だけの同盟は内容的に大きな犠牲として

86) Б. Бурсов, Мастерство Чернышевского-критика, стр. 251.

87) Ч., VII, 153.

88) Б. Бурсов, Указ. соч., стр. 251.

89) この推察は、チェルヌィシェフスキーの章句一少なくとも、かれらが分別ある忠告を聞かなかったとか、自分たちの状態を説明されていなかったとかいうことだけは言わせないようにすべきだ—の意味をうまく言いあてているかもしれない。しかし推察の一つであることに変わりはないように思われる。См. Ч., V, 172.

90) Б. Бурсов, Указ. соч., стр. 252.

91) Е. Эфимов также о революционной борьбе с аристократией, но не о невозможности участия аристократии в революции, а о невозможности участия аристократии в революции, а о невозможности участия аристократии в революции. См. Е. Эфимова, Указ. статья, стр. 157.

92) チェルヌィシェフスキーは、「フランスにおける政党の闘争」のなかで、次のように述べている。「平民は何ら一定の個々の要求なしに戦っていた。平民は自分たちの利益とは、実は無関係な問題への参加に対して、自分たちの地位がもつ重さに夢中になっていた。平民は自分だけが助力を売っていることを気にかけず、あれこれの側に加わる前に、何かの条件をつけて儲けることを決してしなかった。いうまでもなく、平民は何も手に入れることができなかった。」Ч., V, 291,

平民に報いられること⁹³⁾を認識し、ロシアにおいても平民が独自の綱領をもたなければならないと推断している。しかし、上記の「忠告」は、カヴールに言及した一政論⁹⁴⁾にも明らかなように、道徳的な問責でも党派間の通謀でもなくて事柄の理論的な解明に主眼があったように思われる。⁹⁵⁾次に、検閲下のいわゆるイソップのことばの逆説的使用について言うならば、当時の検閲制度下において、デモクラートの独自の綱領文書の発表ならばともかく、リベラルに対する批判文書が実際にどの程度の制約下にあったか、これもわたくしはよく知らない。ただ、そのころかれによって書かれた政論の表現は、この「忠告」の表現よりももう少し幅の広い自由を享受していたように思われるし、検閲制度内部においても数年後に寛大でありすぎたための処分が行なわれたことが伝えられている。⁹⁶⁾少なくとも、この「忠告」における人間の実践の理論的裏付けとそれにもとづくモラルのレベルでの意味づけが、その直後の政治的分析および批判、ひいては政治行動のプログラムの決定に対して理論的基礎の役目を果たしたのではないか、という推測も成り立つように思われる。

ところで、その「忠告」において、チェルヌィシェフスキーは、その自分たち、「われわれ」の身分をかくしてはいない。かれ自身公然と語るように、それは H. H. のような人々によって「侮辱され」、「さげすまれた」階層であり、かれらとのあいだに「憎しみさえ存在していた」階層である。しかし、かれによれば、現在その階層の人々はなお青年時代の読書や訓育によって偏見にとらわれ、周囲の社会からつまらぬ思想を吹き込まれて、例えば『アーシャ』などを読むとき主人公 H. H. の運命にことのほか関心を寄せ、かれの幸福を祈りたい気持ちにさえとらわれている。すなわち、一面では H. H. のような貴族知識人の洞察力と活動力に対する期待を裏切られ、かれらの影響下にとどまるのもそう長くはないと感じ始めながらも、なお他面ではかれらが「わが国の啓蒙の代表者であり、ロシア人のなかの最良の人間であり、かれがいなければロシアの状態はもっと悪くなる」と考えている。⁹⁷⁾このような残された希望から、当時トゥルゲーネフのいわゆる「父と子」の時代に、一方では、新しい思想や習慣で教育される貴族知識人の孫——父の子の子供達——の世代だけが分別ある誠実な市民として行動できるのであると考えながらも、H. H. のような子——父の子——の世代に対して、「おのれの状態を適時に判断できず、束の間の時間が与

93) 1858年に書かれた論文「カヴェニャック」のなかで、チェルヌィシェフスキーは、「パリの労働者たちは、穏健共和派と同盟したために、餓死し、戦闘で何千人も死に、また何千人もが牢に投げこまれるという報いを受けた」と述べている。Ч., V, 38.

94) そこには次のような文章が見られる。「カヴールを責めるためではなしに、事実を説明せんがためにわれわれは言うのであるが、かれはただ一つのことを忘れていたのだ。すなわちエゴイズムの本能はたいへんずるくて計算高いので、その本能だけに支配される人間はどんな天才的な大臣をもだますことができるのだ。」Ч., VI, 342. <Из «Современника» №8—август 1859 года>.

95) 後出注 108) 参照。

96) 検閲本部は、チェルヌィシェフスキーの論文「七月王政」、『哲学の人間学的原理』——王政権力の基本的原理をゆさぶるもの——の印刷を許可したかどで、検閲官ラフマニーノフを譴責した。См. М. П. Николаев, Н. Г. Чернышевский-Семинарий, Л., 1959, стр. 114.

97) この立場を理論化したのが先述のアンネンコフのそれである。かれはこのような「最良の人間」を「現代の思想と行為の唯一の裁判官、評価者」とよんでいる。Анненков, Указ. статья, стр. 349. なお本稿 p. 85 参照。また、リベラリズムが「未来において、すべての肝要なもの、有用なもの、高貴なものにとっての基礎を与えるであろう」とも言っている。Там же, стр. 350.

える有利さを利用できないような人間にとって避けがたい不幸から、いかに逃れるべきかを指し示す」ならば、かれらも必ずやその「賢明な忠告に従うことができるだろう」と信じようとしている。⁹⁸⁾ そこに感じられる語調はイソップのそれではなく聖書のそれである。

それではいったい、その最後の賢明な忠告とは、いかなる内容のものであろうか。チェルヌィシェフスキーはそれを「あなたがたのあいだには、諸氏よ、かなり多くの教養ある人々がいる」⁹⁹⁾ということばで次のように始める。教養ある人間なら古代神話に描かれている幸福の女神の話¹⁰⁰⁾を知っているはずであろう。「幸運な瞬間をとり逃がさないこと、これこそ生活の分別の最も高い条件である」。¹⁰¹⁾ 要するに、一生の運命にかかわるチャンスに、行動を決定する術である。この術をわきまえないならば、「われわれ」とても生活の運命をよい方向に向けることはできない。しかしその半面、「あなたがた」でさえ、もし決定的な瞬間にあなたがたの運命を決する意志さえもっているならば、それでもなお救われないほどあなたがたの状況が不幸であるわけではない。つまり人間の運命というのは、決定的な瞬間に意志を働かせるということにもっぱらかかっているとさえいえるのである。それでは、「状況によって提供された幸福を逃がさないための手段と規則は何に存するのか」。¹⁰²⁾ それに答えるのはむずかしいことだろうか。このように問うて、チェルヌィシェフスキーは、それを次のような民事裁判になぞらえて説明する。この裁判は、いうならば、ちょうど農民と地主貴族とのあいだの訴訟関係のようなものであって、農民は解放を待ちわびること久しく、何度も期待と約束を裏切られて「運命の不幸にたいへん慣れており」、今度こそは決定的であるのになお信じることができず、そのために調停に応じる余地が残されている。それに対して貴族の方は、少なくとも H. H. のような貴族知識人の方は、歴史の審判がなぜか遅れ、審判者がなぜか自分に好意を抱いているように感じ、審判者の忠告を受け入れる用意が全くないわけではない。いよいよ解決を迫られた歴史の審判者は、今こそ農民との調停にふみきる決意をしなければ財産はおろか、刑事法廷に引き渡されて身分の剝奪だけでなく死刑さえもまぬがれまい、早急にも示談を申し入れるべきだと最後の忠告を与える。ここで歴史の審判者とは「われわれ」の良心なのであろう。その良心に代わってチェルヌィシェフスキーは、今こそこの決定的瞬間に「あなたがた」の各人は「何をなすべきか」を考えるべきだとし、次の三つの道のいずれを選ぶべきかと決断を迫る。すなわち、平和的解決を急ぐべきか。事柄を農民が決着するまでソファーのうえに横たわっているべきか。あるいは、利益と名誉を守る唯一の手段を教える審判者に向かっただのしるべきか。チェルヌィシェフスキーによれば、解決は次のマタイ伝の章節によって明らかであるという。「あなたを訴える者と一緒に道を行く時には、その途中で早く仲直りをしなさい。そうしないと、その訴える者はあなたを裁判官にわたし、裁判官は下役にわたし、そして、あなたは獄に入れられるであろう。よくあなたに言うておく。最

98) *См. Ч., V, 171-172.*

99) *Ч., V, 172.*

100) 幸福の女神を運ぶ風によって、この女性の長い垂れ髪は前に吹き動かされる。彼女が飛んでくるあいだはつかまえるのはたやすいが、一瞬つかまえそこなうと追いかけても無駄である。*См. Ч., V, 172.*

101) *Ч., V, 172.*

102) *Ч., V, 173.*

後の1コドラントを支払ってしまうまでは、決してそこから出てくることはできない」。¹⁰³⁾

この章句は、知られているように、ガリラヤの全地をめぐり歩いて御国の福音を伝えたイエスが山に登って座につき弟子たちに教えたあの有名な垂訓のなかで「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ決して天国に入ることはできない」と述べたあとに出てくる文句である。それがここに引用されていることの意味は、例えばブルソフによって、「社会機構のなかのあらゆる悪、あらゆる不正をなおそうとする歴史のさけがたい要求が聖書のペースで表わされたもの」¹⁰⁴⁾と解されている。そして、その不可避的な要求の具体的内容は「リベラルに対する直接的な威嚇として、またデモクラートにとっての行動の綱領——地主階級を歴史の仮借ない、だが全く正しい裁判に付するよう、人民に訴える——として把握されている」。¹⁰⁵⁾ 人民が地主階級を裁判に訴えるべき立場にあることが意味されている点にはまちがいが無い。しかし、ここで重点がおかれている「その途中で早く仲直りをしなさい」という聖書の句を単にリベラルへの直接的な威嚇としてだけとらえる点には問題がある。ブルソフのそのような解釈は、さきに見たかれの地主階級についての断定——すなわち、自由主義的地主は分別ある解決の道を拒絶し、革命の敵としてとどまるという断定——と関係がある。かれにあっては、このような断定のもとに、貴族知識人に対するチェルヌィシェフスキーの「忠告」とその結びの神のことばは、かれらに対する警告とそれにつづく威嚇ということになる。¹⁰⁶⁾ 果たしてそうであろうか。

この最後にかかげられた聖書からの引用章句は、『アーシャ』論中に引用されていたもう一つの章句との関連において理解されるべきであろう。このもう一つの章句とは、イエスが舟のなかから岸に立つ群集に語ったことばのうちで、イザヤの予言として述べられたものであって、評論のなかでは貴族知識人に対する批判のことばとして引用されていた。すなわち、もとの形では、「あなたがたは聞くが、決して悟らない。見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍くなり、その耳は聞こえにくく、その目は閉じている。それは、かれらが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」。¹⁰⁷⁾ 貴族知識人たちは、その生活状況における利害のために、自分の内と外で起こっている事柄の本質を理解できず、それに従って行動することができない傾向をもつという含意である。貴族知識人たちがその生活条件によって社会認識の方向と幅を規定され、さらにそれに基づいて意志内容をも限定される事情については、さきにさまざまな比喩をひきながら縷々説明されたところであった。上記の章句の前後を読むと、イエスはそ

103) Ч., V, 174. (マタイ伝第5章25-26節からの引用)。

104) Б. И. Бурсов, Мастерство Чернышевского-критика, стр. 254.

105) Там же, стр. 253-254.

106) F. B. ランダルはこの問題に関して次のような解釈を与えている。「そして最後にチェルヌィシェフスキーはマタイ伝から謎のようなことばを引いて次のように言っている。『あなたを訴える者と一緒に道を行く時には、その途中で早く仲直りをしなさい……。』そのアレゴリーとその解決はチェルヌィシェフスキーが求めていた倫理生活と直接に合致していない。しかしそれを持出すことによって革命への呼びかけが止むをえない直接的な、また最後の神の声のようなものであることを暗示するには役立った」。F. B. Randall, *op. cit.*, p. 69.

107) マタイ伝第13章14-15節; См. Ч., V, 172.

のような人々に対しては、「わたしは口を開いて譬を語り、世の初めからかくされていることを語り出そう」という予言者のことばを成就するために、比喩を用いて語らざるをえなかったことがわかる。御国のことばを聞くが地上の利害によってそれを悟ることができず、たまにとびついてそのことばを受け入れる場合にも実際の困難や迫害に出会うとつまづいてしまう、そうした人々を、イエスはいばらの中にまかれた種、土の薄い石地に落ちた種に譬えたのだった。これは、地主貴族としてのその出身に強く制約され、その身分を合理化するさまざまな理論のいばらのために首尾一貫した社会理論を抱けず、たまたま西欧の革命理論に魅惑されることはあっても実行上の困難にすぐたじろぎ、迫害におびえる、そのような貴族知識人の譬として、きわめてよく当てはまるものである。チェルヌィシェフスキーは、このような「見ても見ず、聞いても聞かない」H. H. のような貴族知識人に対して——いわばイザヤの予言を成就するために——前述の裁判の譬を挙げたかに思われる。したがって、このような筋で裁判の譬を見直すとき、そこに浮かび上ってくる要点は、——いわば殺戮の正否を言い争う律法学者やパリサイ人の義にまさる義のために——「仲直り」の義を示すことにあったことがわかる。その義は、単に農民革命の客観的な必然性といったようなものではなく、貴族知識人を含めておよそ知識人たるものに行爲の規範として実行の決意を迫り、その違反者に対して審判を行なうところのものである。しかし、このような審判、神の義はあくまでキリスト教的アレゴリーであり、チェルヌィシェフスキーは少なくとも通常の意味におけるキリスト者ではなかった。いふならば地上の奥義——「天国の奥義」に対して——を知ろうとする立場にあるかれには、いわば「仲直り」の義を理論的にきわめてゆく志向があった。さきに述べたように、自分の運命がただ自分の意志だけにかかっている決定的な瞬間に何をなすべきか、それを決することはたやすいと、このようにかれが言うとき、われわれは、2年後に広く論争を呼んだ書『哲学の人間学的原理』のなかでかれが述べている次のことばを思い出す。「その場合、いずれの側に理論的公正があるかをきめるのは、そんなにむずかしいことではない。……理論的な偽りは必ず実践的な害に導くものである。個々の国民が自分の利益のために社会の利益、あるいは個々の階級の利益、全国民の利益を踏みにじったときは、その利益の害された側だけでなく、その侵害でもうけてやろうと思った側さえも、結果においては損害をうけるのがつねである」¹⁰⁸⁾ だが、その理論的な意味を論ずることは、本論のテーマを超えた仕事であらう。ここではただ本稿でとりあげたチェルヌィシェフスキーの一篇の評論が、その後のかれの政論や哲学論の出発点たりえたことがわかれば、それで満足である。

〔附記〕 本稿は昭和46年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

108) Ч., VII, 286-287. 松田訳, 前掲書, p. 109 参照。

«Русский человек на rendez-vous» Н. Г. Чернышевского

Кадзуко Идэ

В настоящей статье автор анализирует и выясняет намерение и построение критической статьи Чернышевского «Русский человек на rendez-vous», на фоне русского общества в период назревания революционной ситуации, в особенности, враждебности и борьбы русских либералов и демократов.

Некоторые исследователи-историки общественной мысли подчеркивали, что основной политический смысл выступления Чернышевского был заключен в разоблачении враждебного революционному движению буржуазно-дворянского либерализма. Кроме того, они считают, что Чернышевский в своей статье осуждал самого Тургенева как дворянско-либерального писателя. Но может быть, их понимание одно-стороннее.

Что касается намерения статьи Чернышевского, то автор против мнения исследователей-историков утверждает, что намерение статьи Чернышевского состояло в идеологической критике в общественном движении, как показывает её заглавие «Русский человек на rendez-vous», не в литературной оценке повести Тургенева «Ася» как драма души девушки. В статье Чернышевского развиваются защита Тургенева от эстетской критики и отграничение его от либералов на почве реализма. По мнению автора, главное то, что критик устанавливает враждебность либерализма правдивому таланту Тургенева.

Потом, построение его статьи, то анализ её построения, то есть анализ экспозиции его статьи очень важен для познания того, что его идеологическая критика была не внешняя, а имманентная. В экспозиции намечены в первую очередь взаимоотношения между критиком и либеральным читателем, затем между критиком и автором анализируемого произведения; в дальнейшем разворачиваются отношения между критиком и демократическим читателем. Таковы линии, определяющие построение его статьи. Они позволяют утверждать, что Чернышевский уделял исключительное внимание работе над формой статьи, над её композицией и сюжетом. Для того, чтобы выяснить это, автор разделил его статью на части и исследовал их логические связи. При этом, самое важное, это *начало* статьи с тремя вариантами. Анализируя его подробно по мере возможности, автор сделал вывод, что принцип, определяющий всё построение статьи состоял скорее во внутренней критике идей в сознании множества тогдашних читателей, так сказать в самообвинении, чем в объективном обзоре партий в России. Большой интерес, в частности, представляют рукописные материалы, связанные со статьей. Мы видим, что самый процесс создания литературно-критической статьи вылился у Чернышевского в поиски наилучшего решения задач. В этом убеждает нас анализ канонических редакций статьи и черновых вариантов. Задача ведь заключалась не только в том, чтобы выяснить общественный, классовый смысл либерализма, но и в том,

чтобы раскрыть систему его самооправдания. Одна особенность тактики Чернышевского в борьбе с противниками в том и заключалась, чтобы сначала признать их заслуги и выразить им сочувствие, а после этого последовательно анализировать, объяснить и разбить их. В своей статье Чернышевский формально встав на точку зрения либералов, постепенно взрывал её изнутри.

Как известно, в конце статьи делается последнее предупреждение либералам. В монографии о Чернышевском, выпущенной в США недавно, заключительные библейские слова статьи рассматриваются как объявление борьбы против дворянско-либералов эзоповыми словами при цензуре. Автор понимает наоборот эти слова как призыв дворянско-либералов к освобождению крестьян и преобразованию страны. Дело в том, что Чернышевский разоблачая сущность либерала, все время сочувствует в его несчастье, хочет помочь стать счастливым, ведет себя по отношению к нему как, будто желает ему революционное действие. Чернышевский останавливается преимущественно на слабых сторонах читателя-друга, разъясняет ему истинное положение дел, опасное для него поведение либералов, стремится освободить его от иллюзий. В этом контексте слова апостола Матфея следует воспринимать не как прямую угрозу либералам и программу действия для демократов, а как призыв принять решение к действию на основании научной теории. Автор считает, что надо воспринимать библейские слова в соотношении с его статьей «Антропологический принцип в философии».